似顔繪本 俳優楽室通

京乙
208

帝國圖書館藏

ガラス使用

繪本似貌 俳優樂室

附リ　見よるかくハ文舍

讀本の音趣ハ役者とこしへ

むかしも今もかはらぬハ　一陽齋豊國

附　歌舞妓顔見世氣質

録　夷曲三十六謌撰

并　似よりやく花あや先

似顔の生寫ハ三十一もじのかざりぬ

役者まねき　歌川國政

京乙
208

東京圖書館
門　類　京乙函　架　二〇八號　一冊

国立国会図書館　タイトル『俳優楽室通』　請求記号　京乙-208

ガラス使用

題巻首演文

如是我聞浮屠化の方便ハ八百万の神變子曰
君子の偏屈尓老荘ハ寓言と狂言綺語
の筆すさみ。神儒佛も三權ハ是をもと
日域乃お國戯場。三教作意ゟ[illegible]
彼月令れ亂本戸化し[illegible]
まならびに上寶[illegible]七五三太夫[illegible]
不集まるか[illegible]

明治二六・一一・五・購求

手れんてくだと孔子も時と江戸節かゝる大薩摩は修善奉行。諸悪幕明に続き其子は鹿の八つ出し耳。お江戸の道にあらぬ振ることくまとひとふ庸聾桟舗見れども見えず追出す。唯弁当を喰共其味ひを志らず拍子木。厭る演舌云幕ハ欠伸の口とあきれ川。渕の音と名乗るあはれ妙なる盡ぬ无量の手唄新曲無上

聖堂新狂言。孝悌忠信四段続き。流轉輪廻若大道の六。嗚呼後世可懼。阿耨多羅三役三舞臺の大道なり。綺羅を飾る傍に拂ひ秘清る呑太郎。况や切落は傳傍ひ芳ある東西く一幕十六羅漢基十六重とも初めておろかれ。出生且遠遊六情は。六根清浄と西寧くも。やかましく

老婆ハ古き六交て。ゐなか都の錦絵

似白をあんじ一文字屋たてられ

勝川豊国其政。筆を生写の妙

とのつかを称せず。劇場有て桂に

ぢかぎにがし。余両画の中に間を居

く。儒仏神の切接覚ハ朝暮の三馬

早し板元のおさく〳〵しく作ハ

みぐるをやらじとおりしろまん三百六

ゑ撰集をと。引ちぎる言葉も竹の

栁まどぐらなのぢら

中上ますト

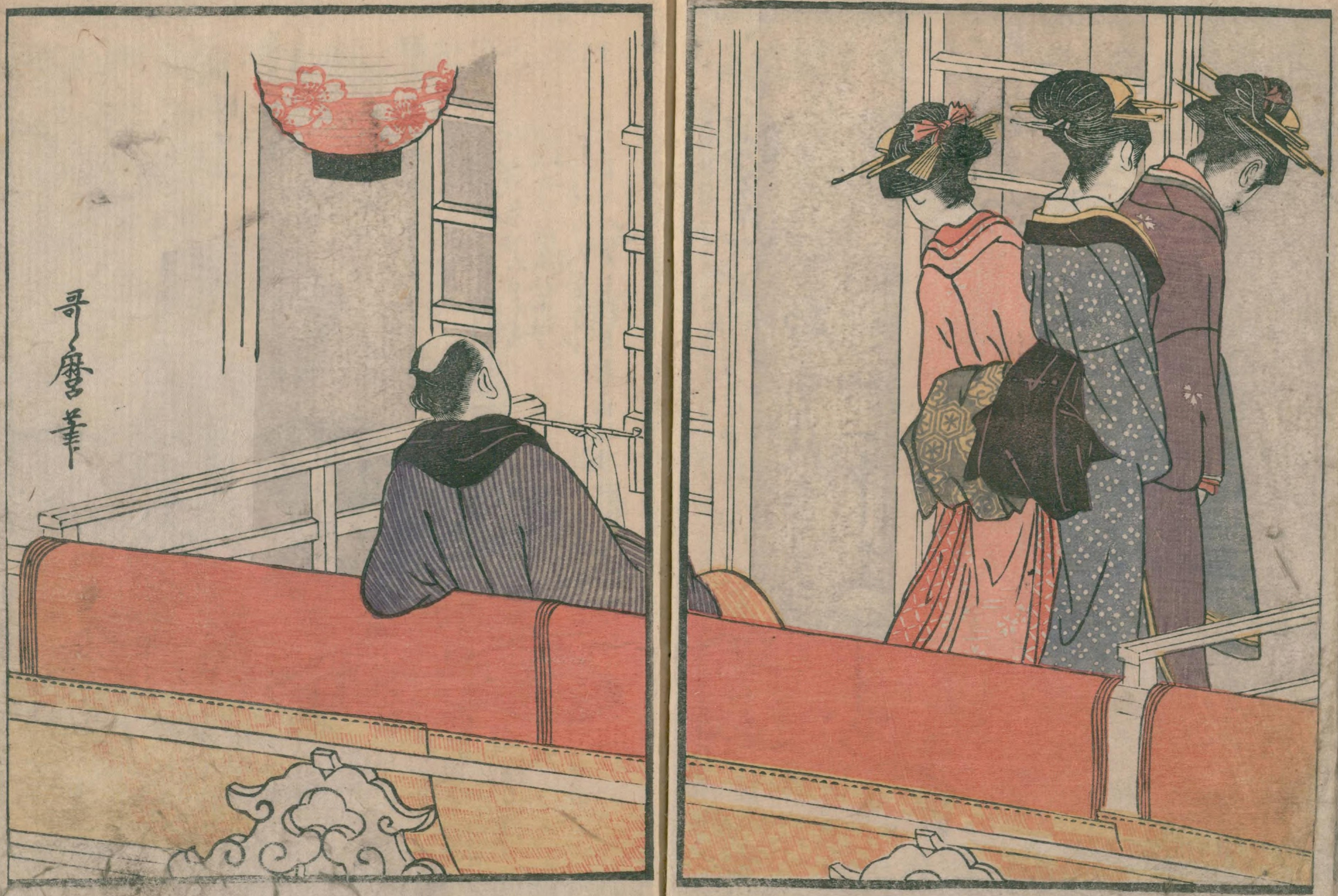
云爾

寛政己未春

三角に雪を眺て

式亭三馬誌

ガラス使用



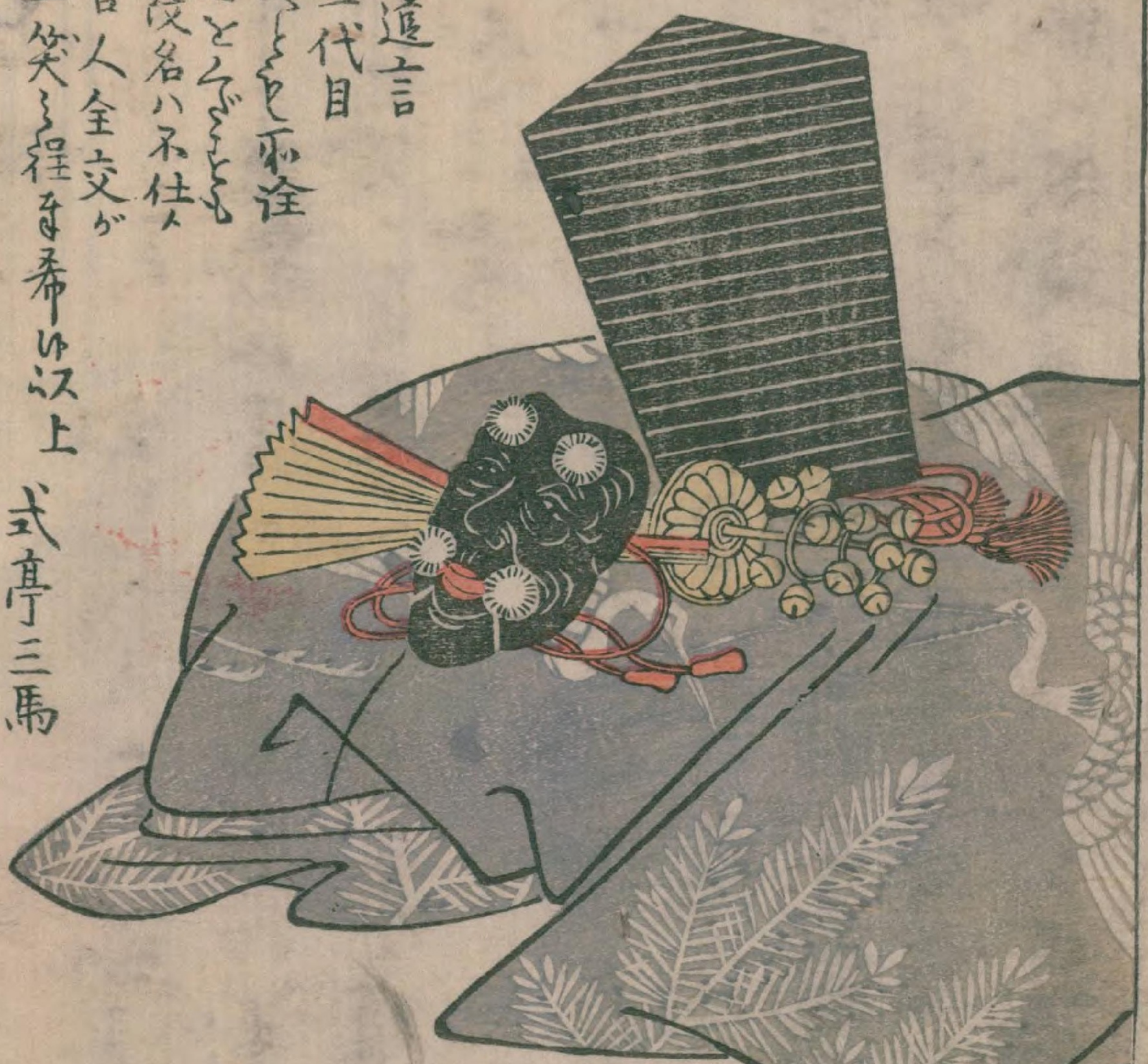
ガラス使用

乍憚口上

兼而申置候
江戸通人
故人 芝全交

狂名の義全交遺言によつて小子二代目全交と稱成ましても不詮ふ及事ニ故人の名とぞんじましてもいかゞと存じまして改名ハ不仕候猶未熟の一作古人全交が倶ともなされ一笑之程奉希候以上

式亭三馬



凡例

一 俳優卅六人と限ることハ余が校合にあらず画工豊国門人国政の両子能熟學する圖を而已之に着せ故に此書に從漏たる名人の俳優多く有り猶委くハ後巻に讓るのみ

一 高名の諸子に需て夷曲卅六番撰とれして首に冠らしむるハ新好士の耳目を驚さんがため狂哥俳優共つり其生配前後次第ニ同人ニ甲乙を定むるにあらず閲者推て亂見なる事なかれ

一 原此書の趣ハ似顔を旨として余假よ輯着し

ガラス使用

成く校合となるを予が愚言の序語ハ頗似寄れり

吊燈持なり赤短智の一著述ハ是夷曲が

抓履僕し其父ハ往古の自笑其蹟が口調に

倣ひ俗の心（八文字屋本）詞ハ大帳の抜萃を讀に等し恰も

賢愚不辯諺に耻甜言蚶と同日の論なり

賈客の大君子ゆるしたまへ

一 市川白猿ハ歌舞を辯して園梧するといへども東産の大人豈

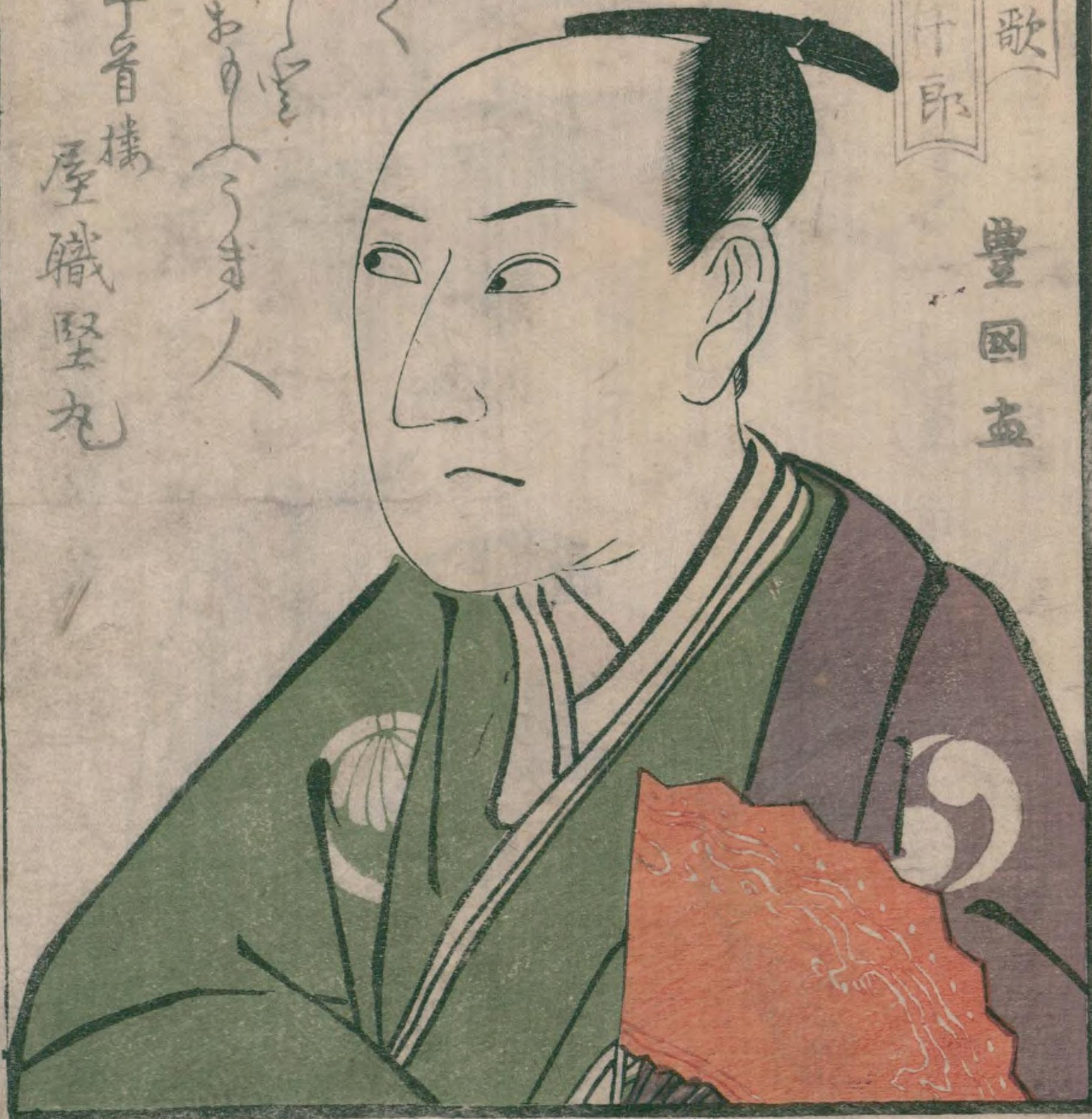
さ席を除きんや其慣ハ白猿素顔にいたれば書籍に

序文なれバごとく雑著に菜の葉をさがごとし依て今

巻軸に居て君子の非言を塞ぐ其為凡例とす

寄役者戀歌

沢村宗十郎

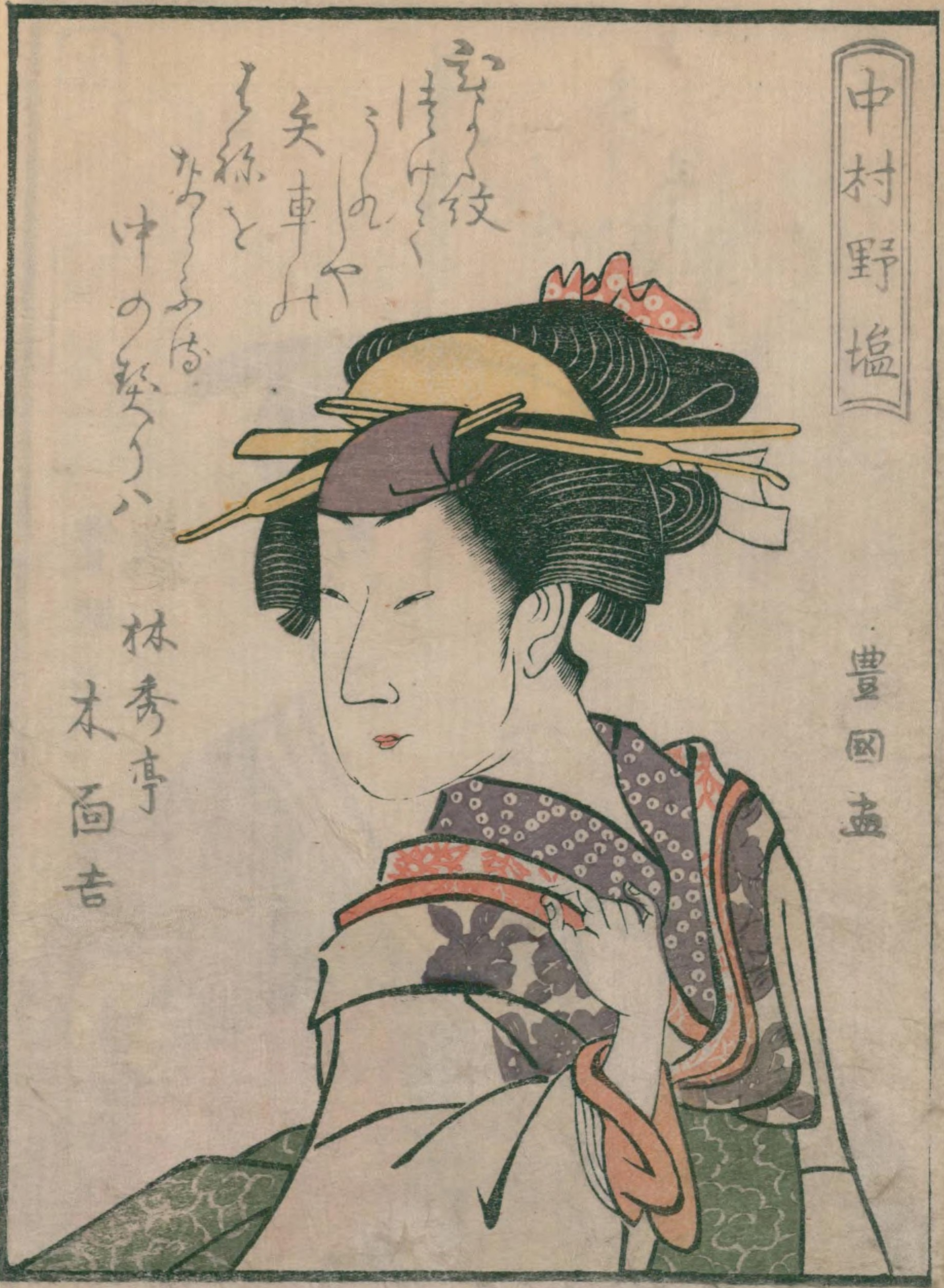


豊国画

[illegible]おもふさま人

千首樓
屋職堅丸

東京圖書館藏

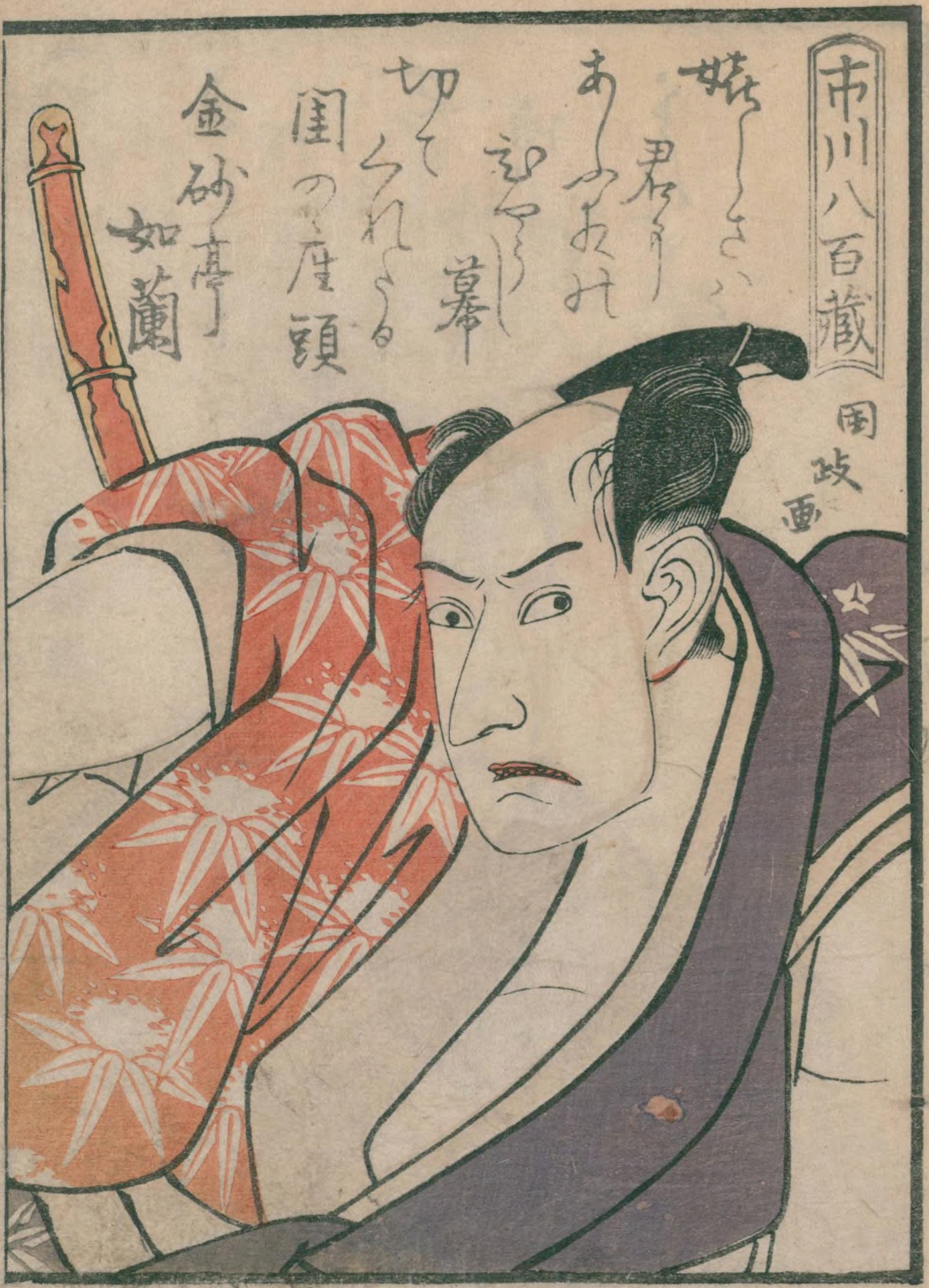


中村野塩

むかし紋
はなやかく
うれしや
矢車みえ
末孫と
なつかしみは
中の桜ぞ八

林秀亭
木面吉

豊國画



市川八百蔵

嬉しさハ
君より
あふおれ
記念し
幕
切て
られさる
国の座頭

金砂亭
如蘭

国政画

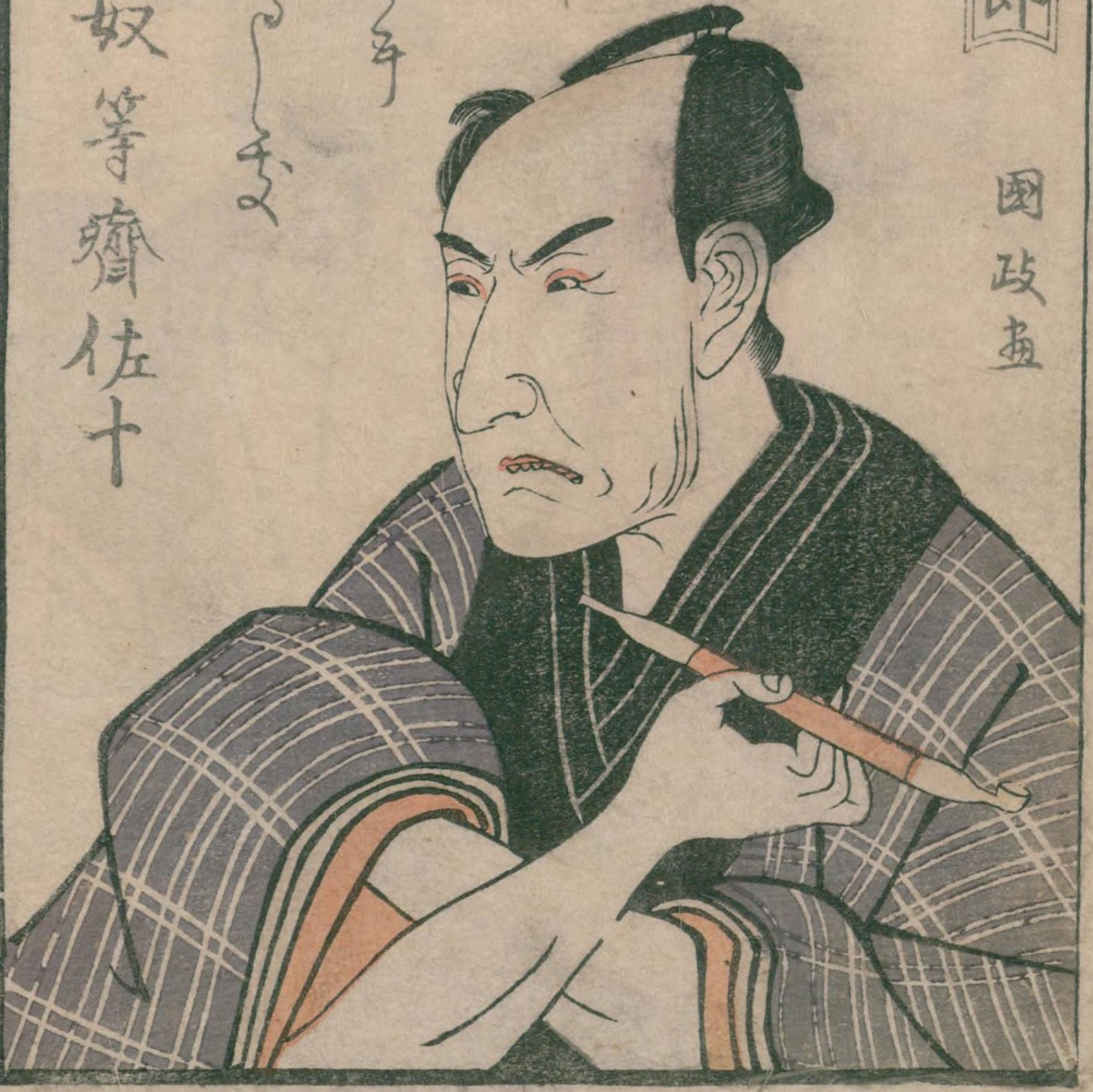
ガラス使用

松本幸四郎

恵へむる
涙を
袖の
志まぎぬや
格子
かうしし手
されて
くるしきぞ

奴等齋佐十

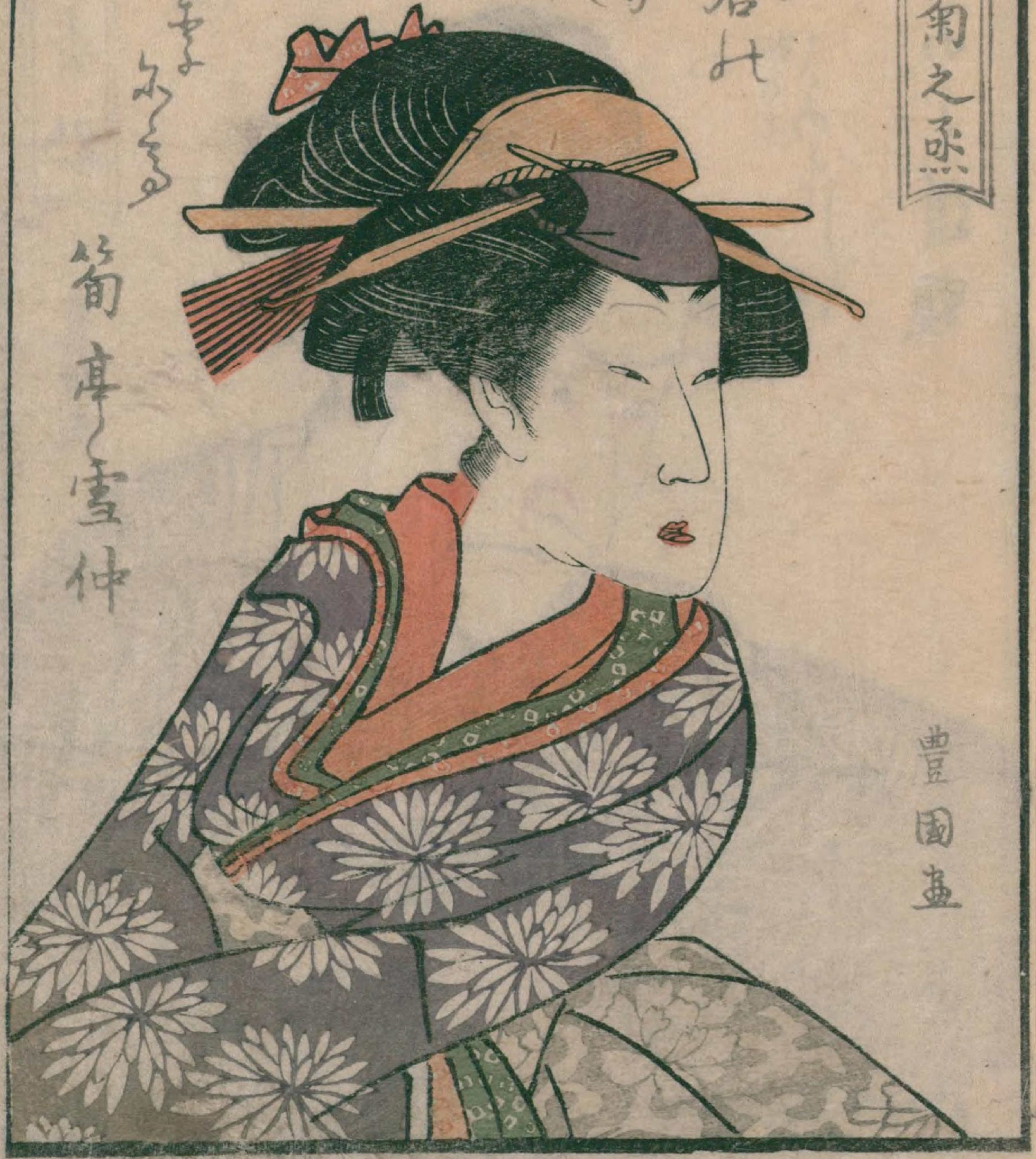
国政画



瀬川菊之丞

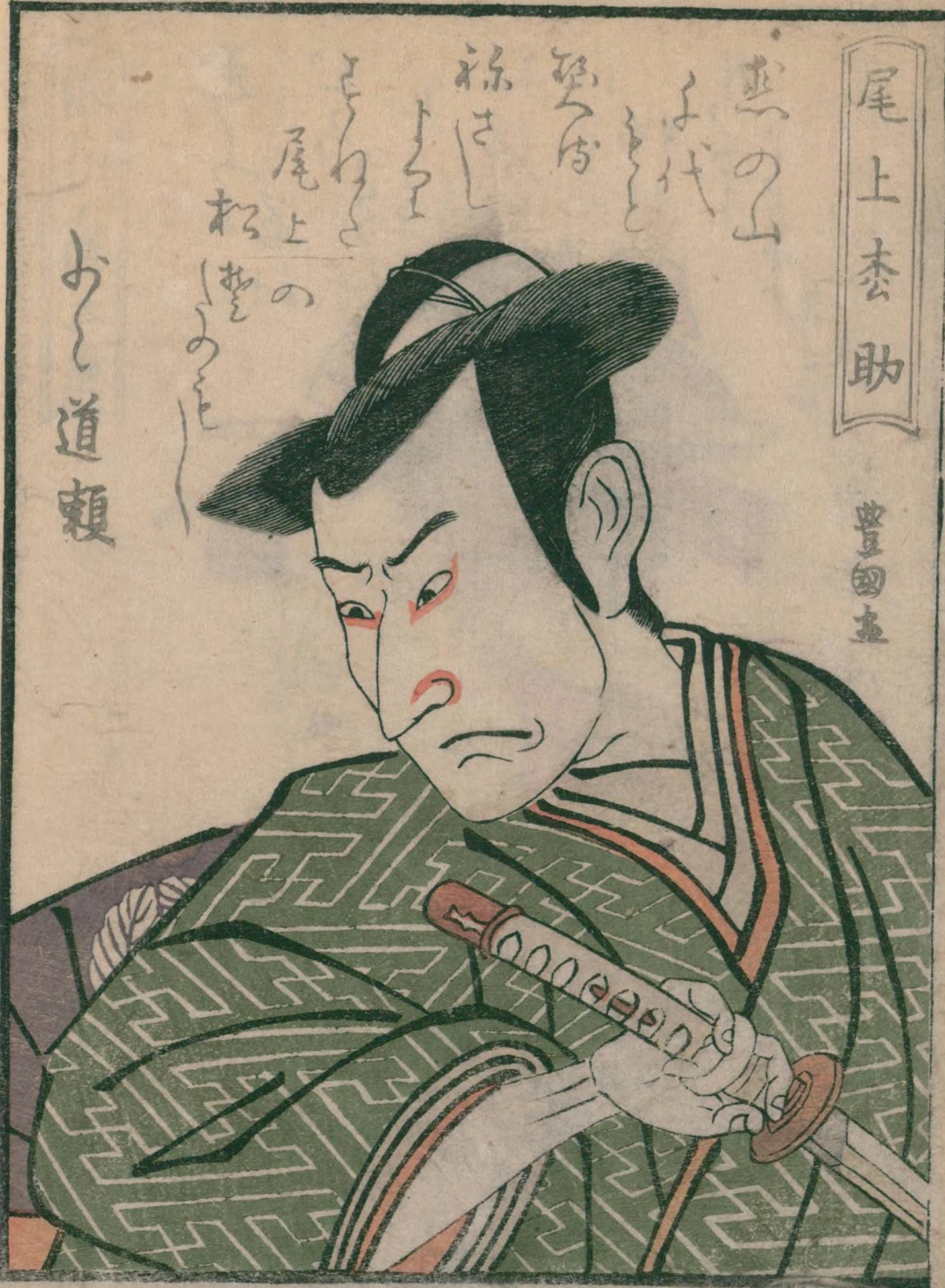
むつる名み
むろかを
うし
結綿の
濃紫ハ
桔梗れ
ちるも
ちりもよ
ゆかる

筍亭雪仲



豊国画

ガラス使用

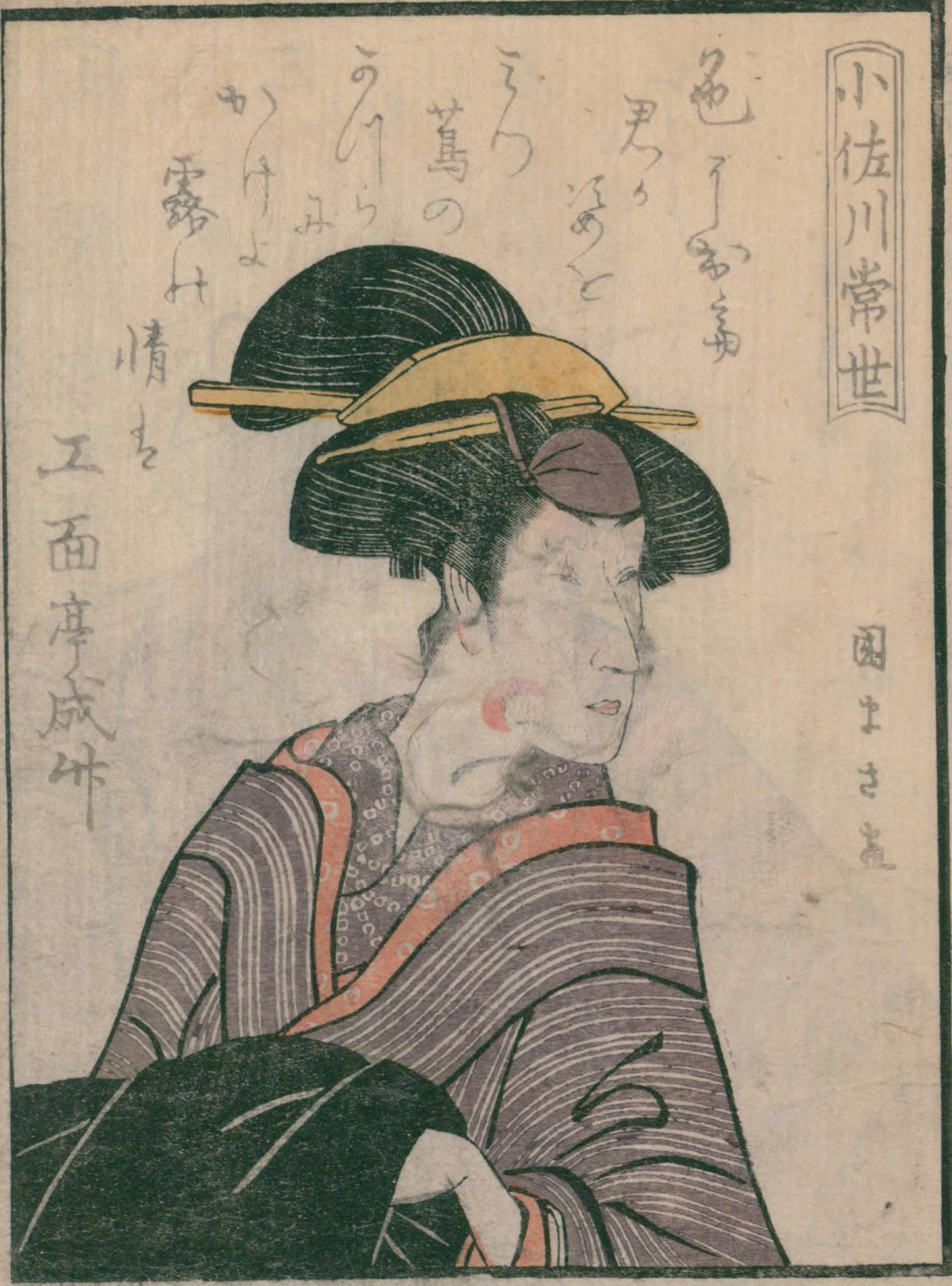


尾上枩助

恋の山
は代
もと
越ゆ
禄さし
よりも
まわさ
尾上の
松を
しのきし

おし道頼

豊国画



小佐川常世

色ふかき
君か
なめと
こゝろ
蔦の
うつら
み
かけよ
露み
情を

工面亭成竹

国まさ画

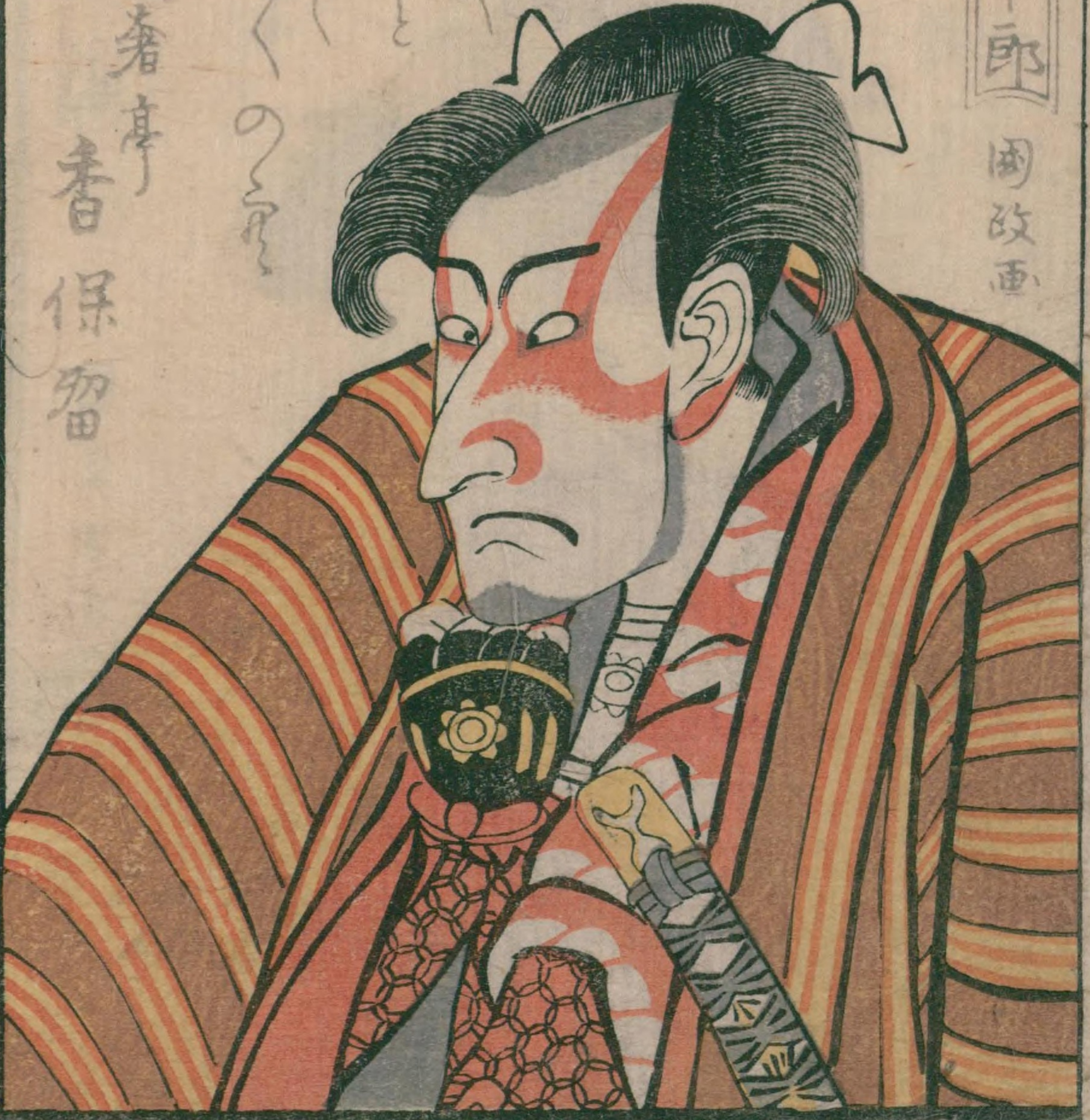
ガラス使用

市川團十郎

国政画

志ハらくと
紀る袖ふ
今ちるや
日の出と
けなましし
きめくのこゑ

蘭奢亭
香保留

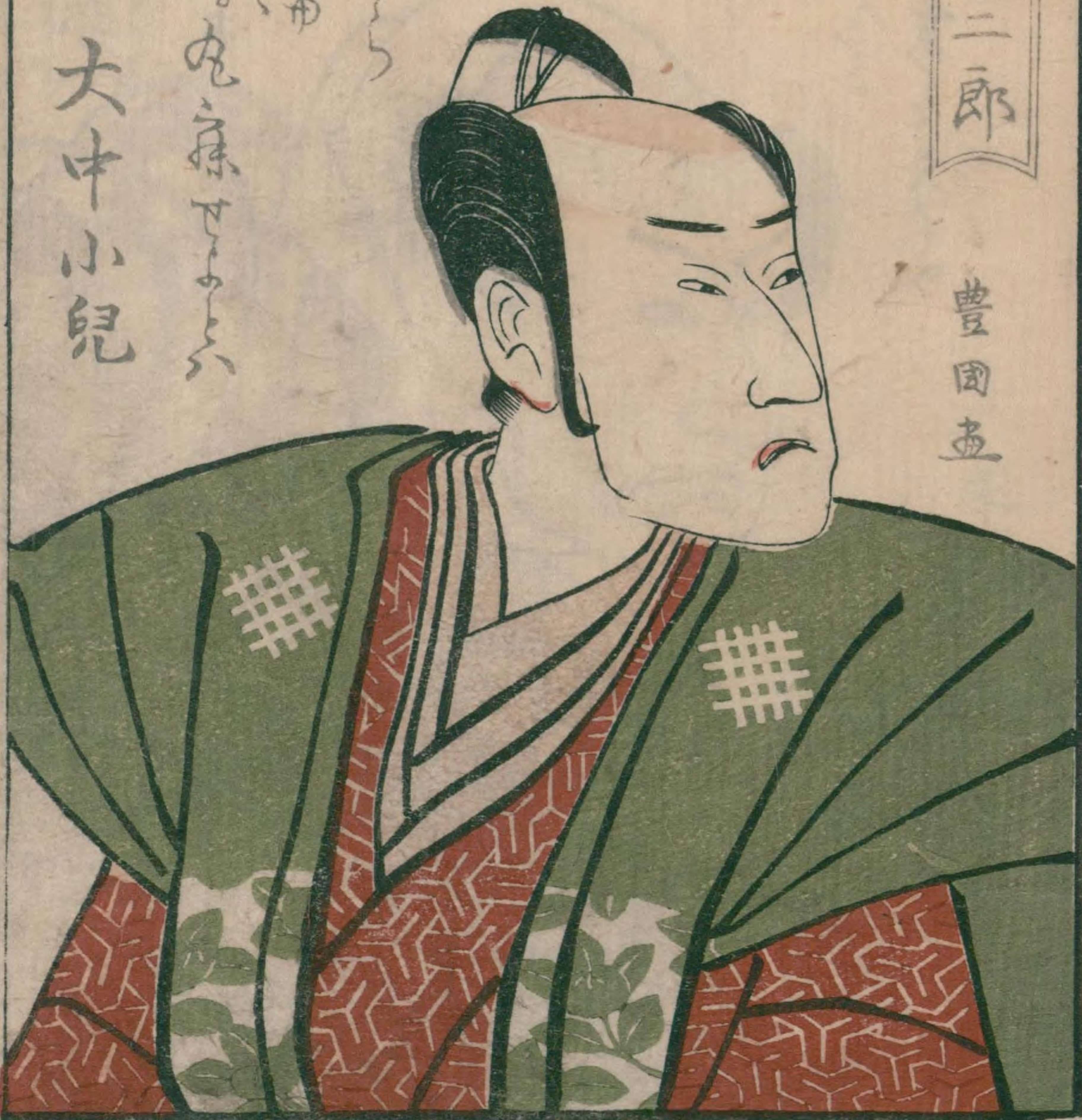


坂東彦三郎

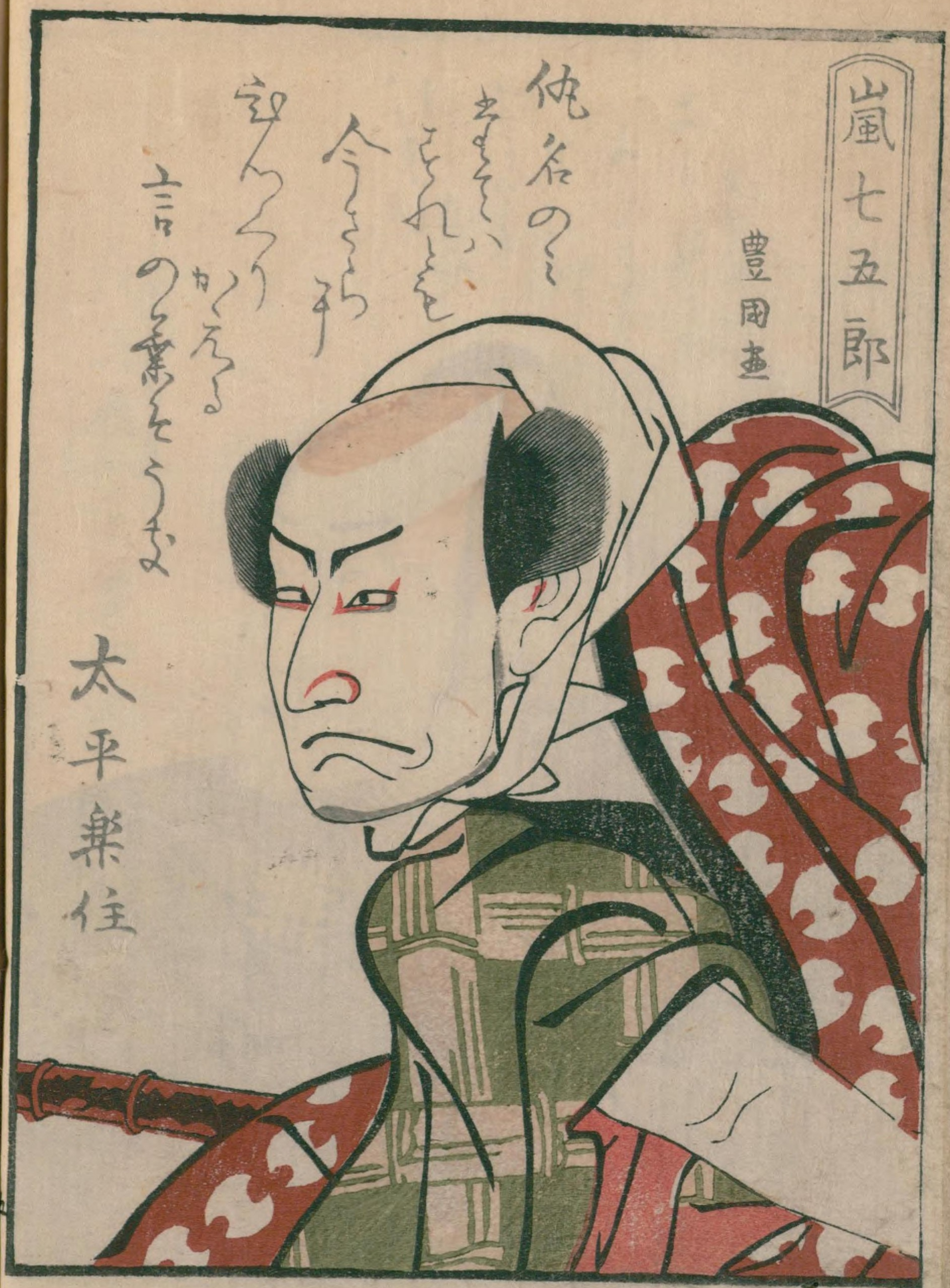
豊国画

おもひきや
はなちと
らしくを
よもとくら
まつる物かは
待る丸
麻せまふ

大中小児



ガラス使用



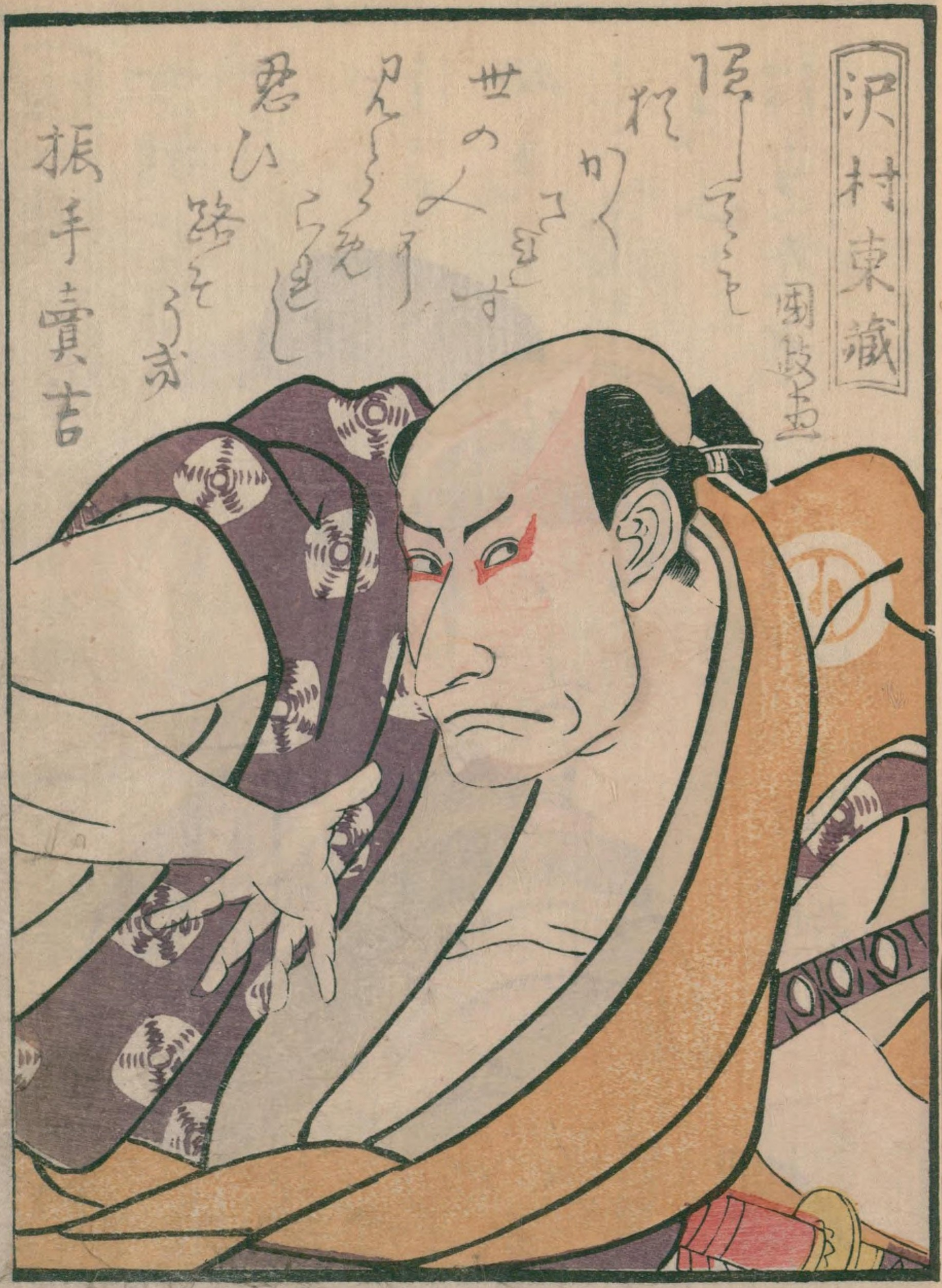
嵐七五郎

豊国画

俳名のこ
まよいは
されとも
今さら千
知らくり
かくれる
言の葉そうるむ

太平楽住

ガラス使用



沢村東蔵

国政画

隠しても
於てかく
こぼす
世の人ハ
みんなゝゑ
ら通し
君ひ
路をうま

振手賣吉

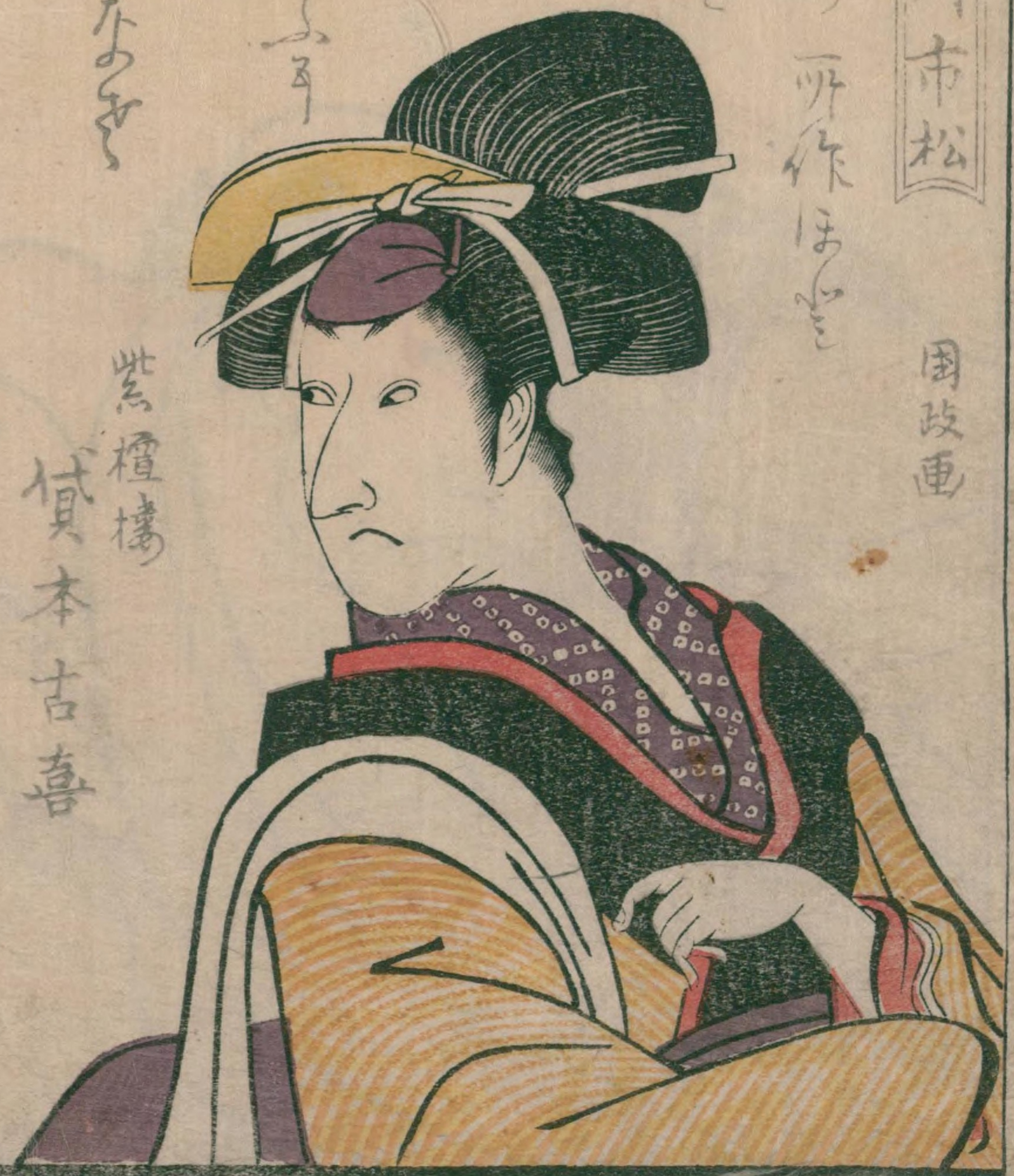
ガラス使用

佐の川市松

女形の所作はまことゝ
見れと
ふうし
侍けり
おもし
しろさふ耳
笑ふ
ほまれなるを

紫檀楼
貸本古喜

国政画

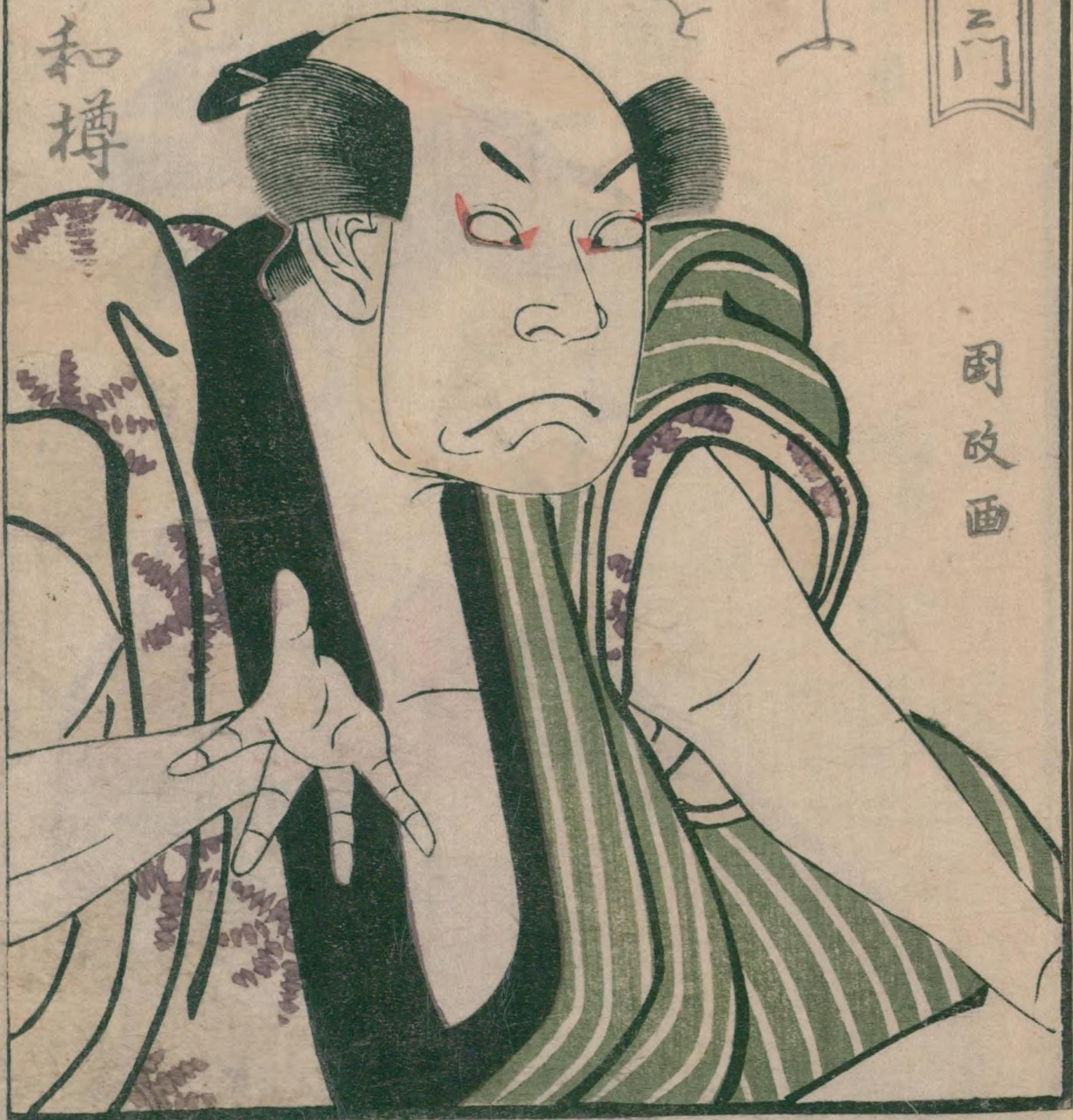


大谷友右ヱ門

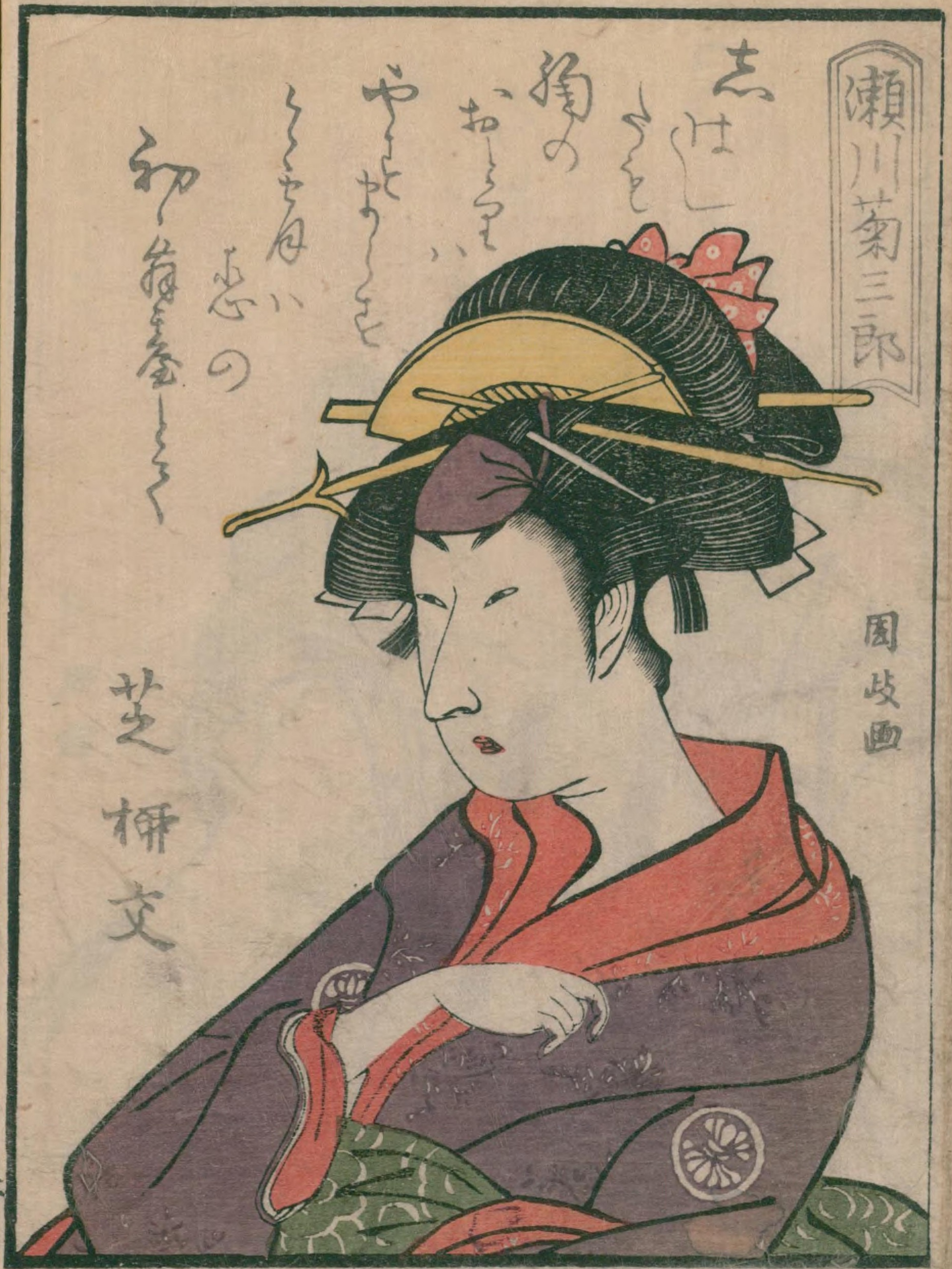
悪まても
心のめと
あのしやみ
ちゑん
ころ
小まの
きこえ
嬉しき

鈍々亭和樽

国政画



ガラス使用

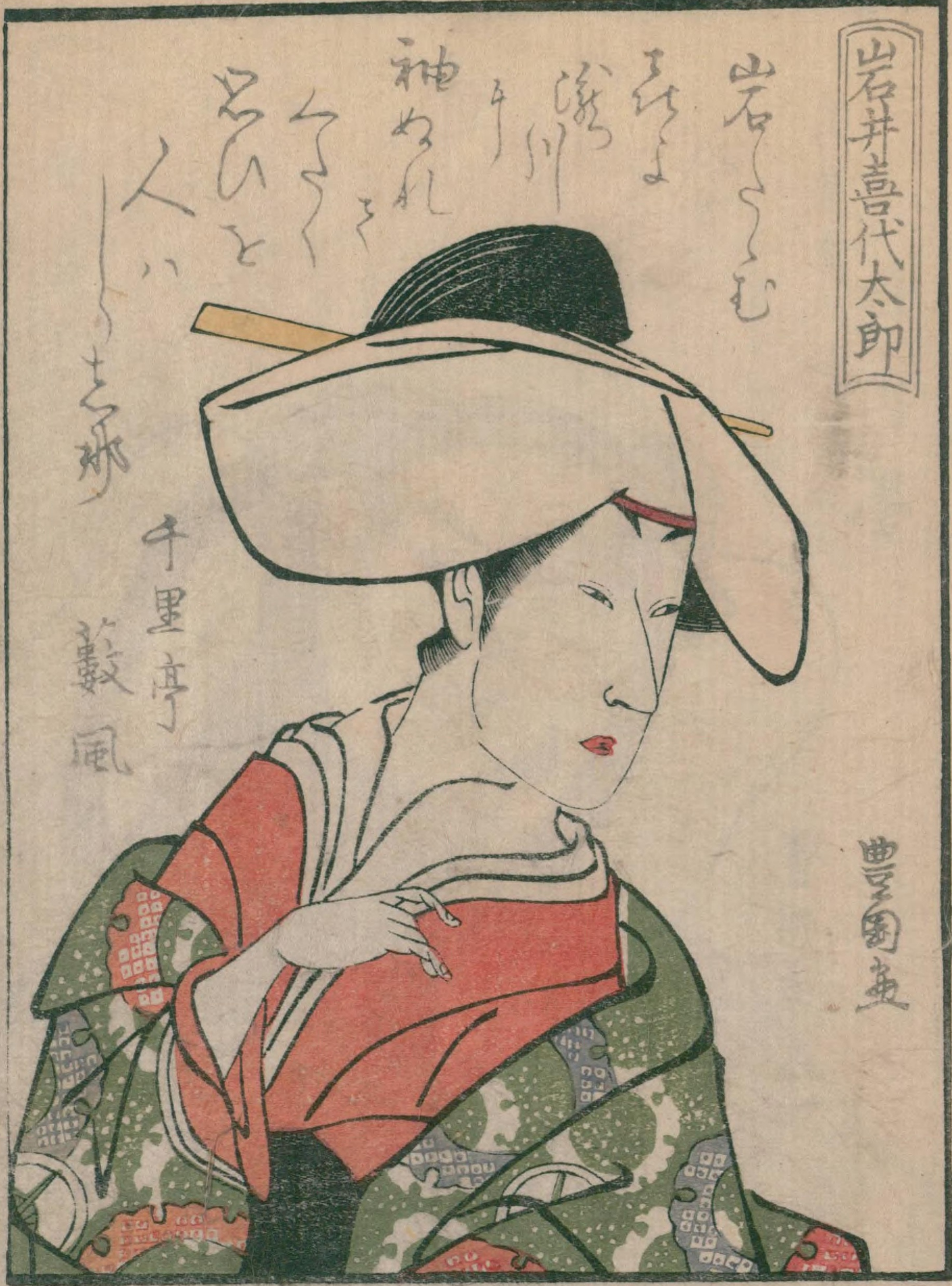


瀬川菊三郎

志はしらを
独の
いおりハ
やまとなでしこを
くさ母ハ
恋の
初物金しく

芝栅文

国政画

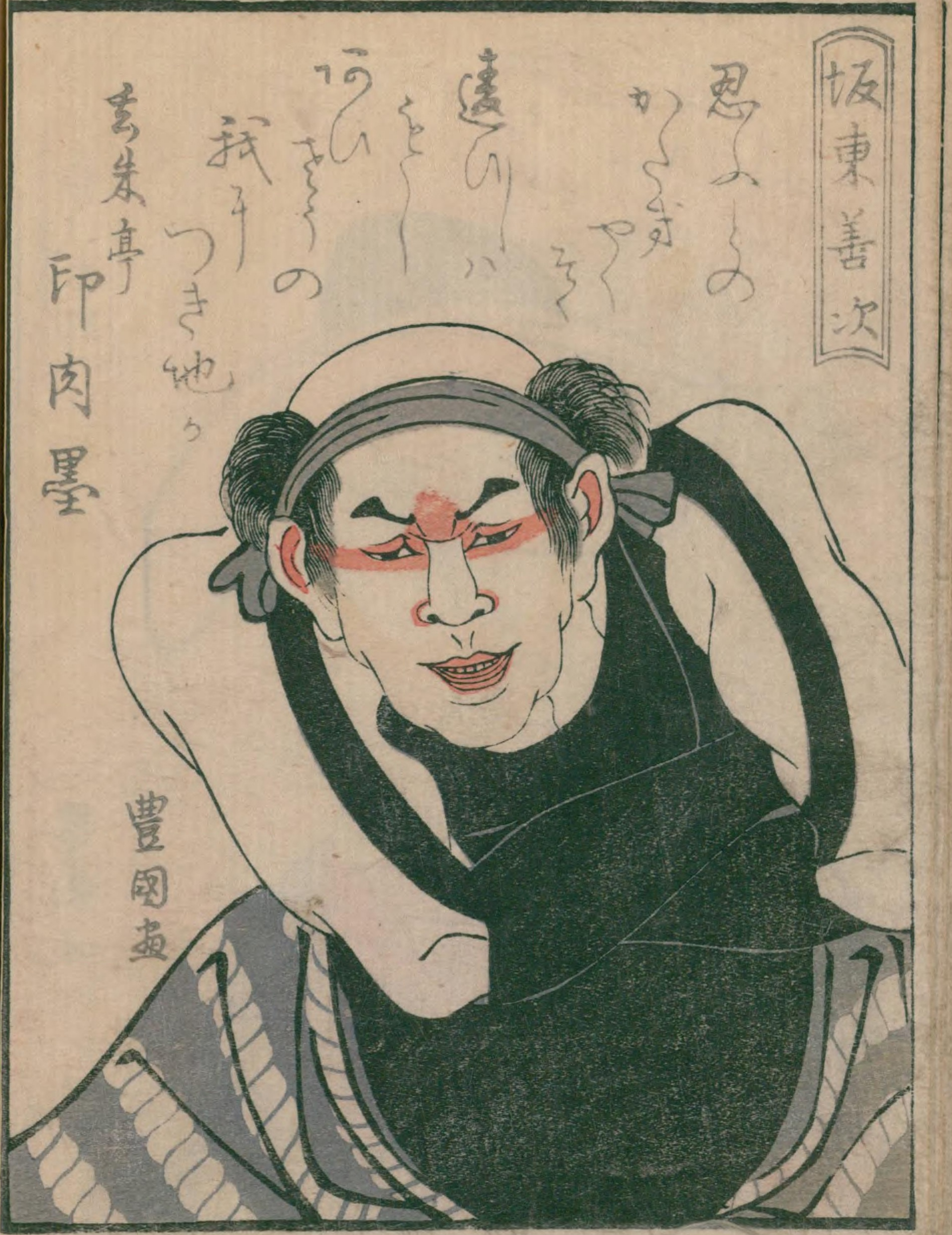


岩井喜代太郎

岩こふむ
玉よ
瀧川
千
袖ぬれ
と
ゆるく
思ひを
人ハ
しらさ志称

千里亭
藪風

豊国画

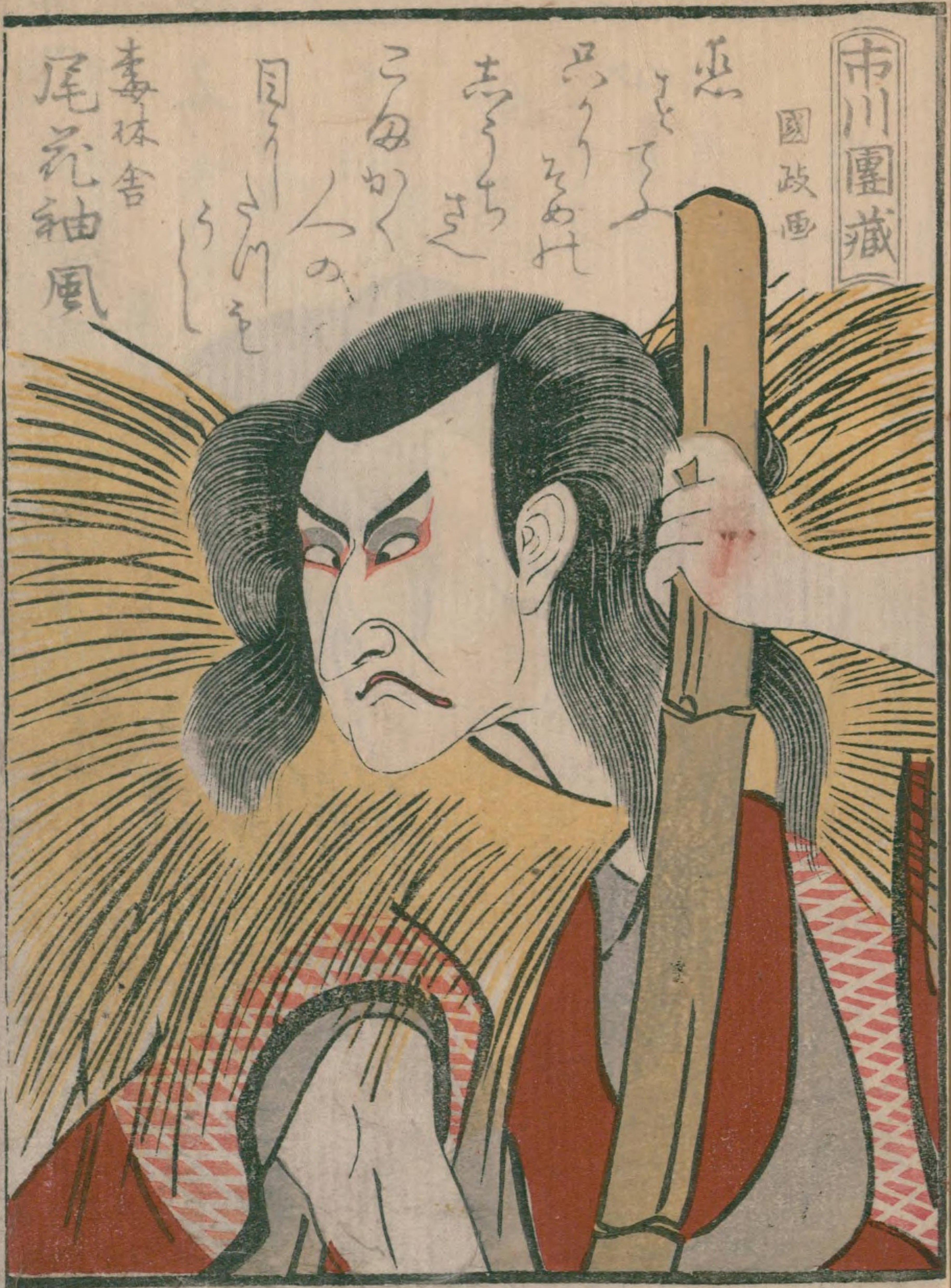


坂東善次

忍よるの
かゝみ
やく
ゑく
遠ひりは
をとし
阿ひきやうの
我手
つき地ゟ

壽朱亭
印肉墨

豊國画

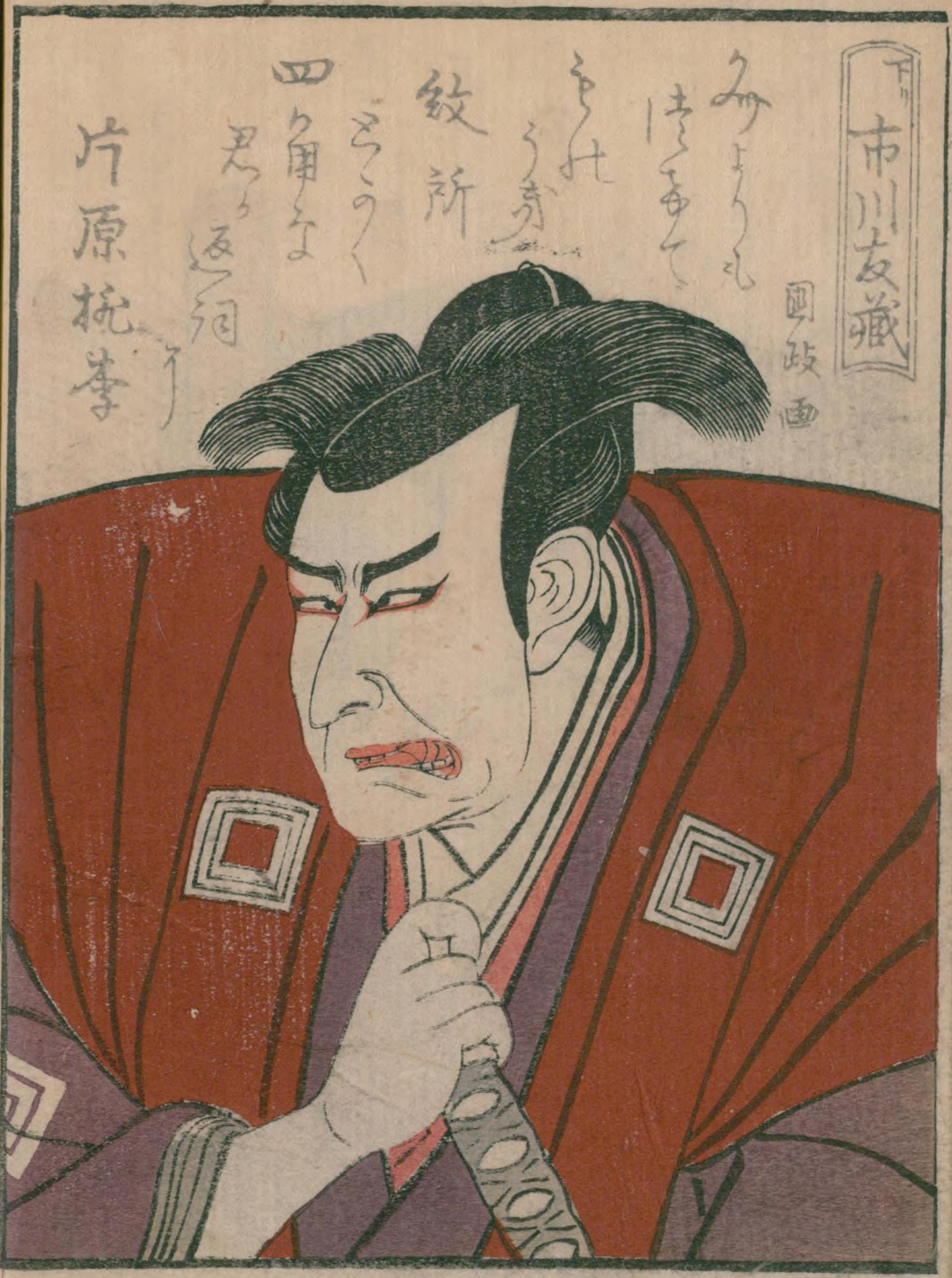


市川團藏

國政画

悪
さて
見りをあれ
志うちさ之
こ母かく人の
目ゟしきれを
うらし

壽林舎
尾花紬風

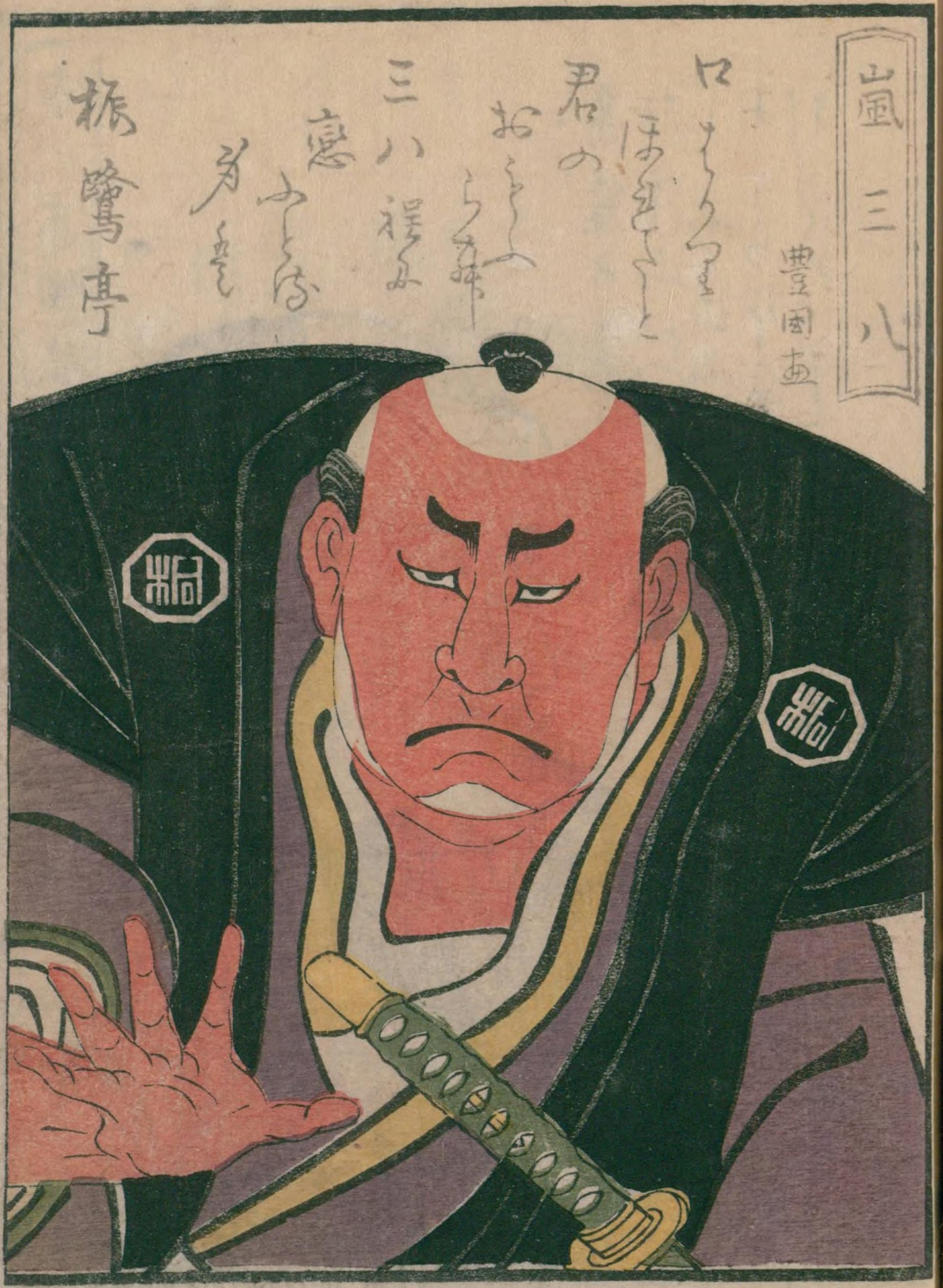


下り 市川友蔵

国政画

みよりも
はきまて
もみれ
うら身
紋所
ごとく
四角な
君か
返す詞

片原梲峯



嵐 三八

豊国画

口もとは
ほをさしと
君の
おもしへ
らるゝ
三八
程な
意
ふかき
身を

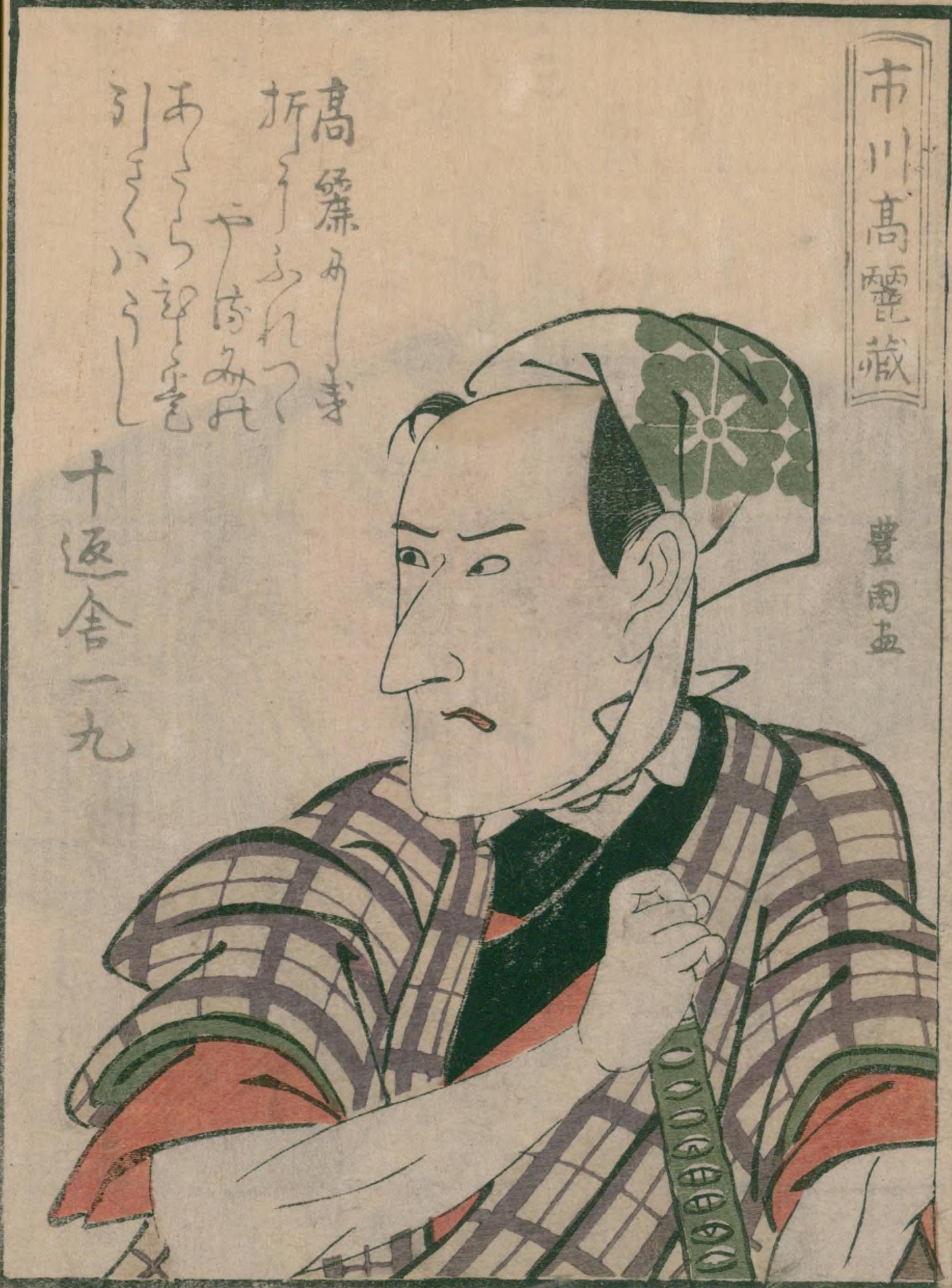
梅鷺亭

ガラス使用

市川高麗蔵

高麗めし春
折てふれて
やはみれ
あつら詠色
引さくいうし

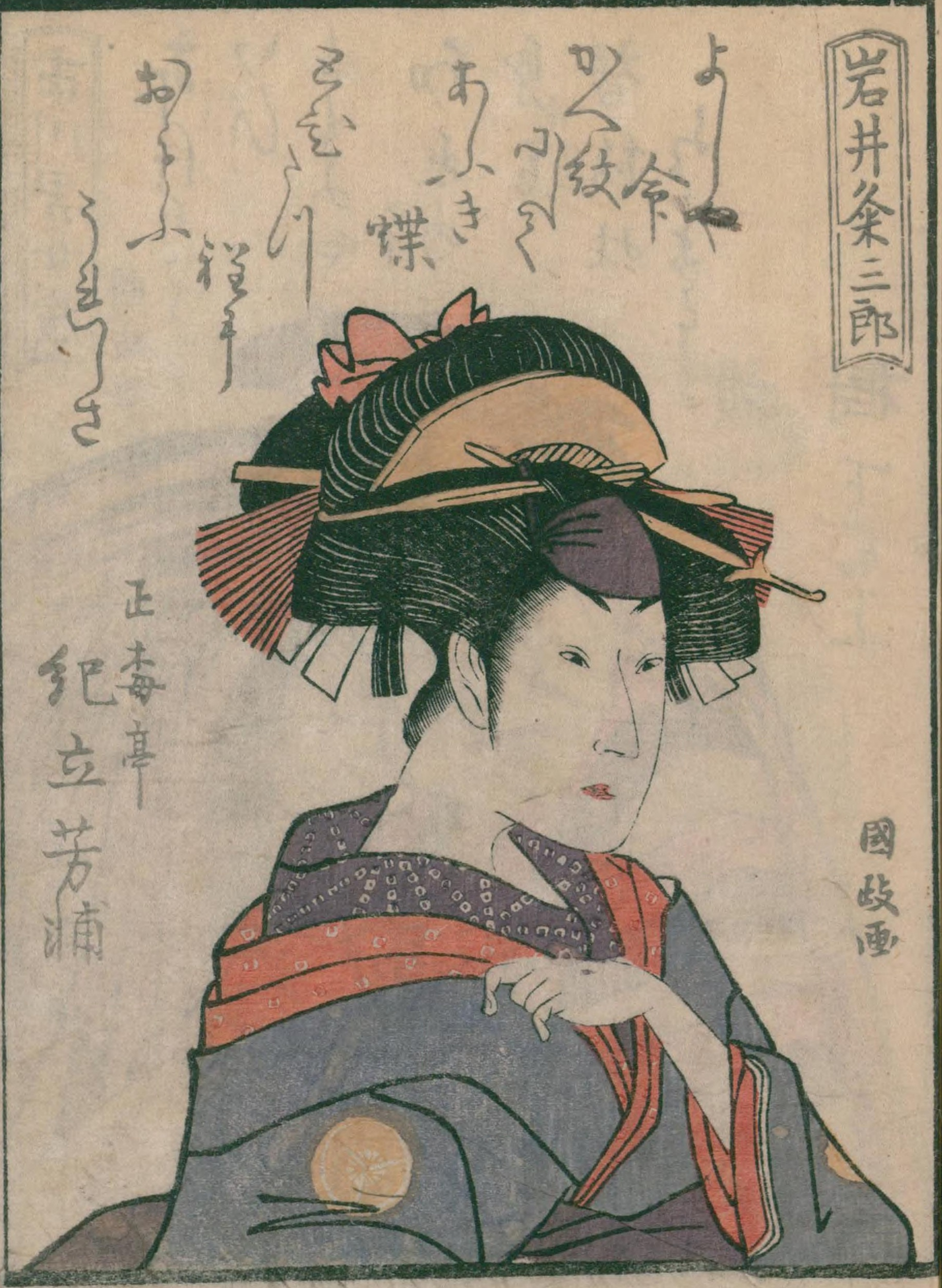
十返舎一九


豊國画

岩井粂三郎

よし命
かく紋
つゝく
あふき蝶
色川
おまふ
經年
うきつきさ

正壽亭
紀立芳浦


國政画

ガラス使用

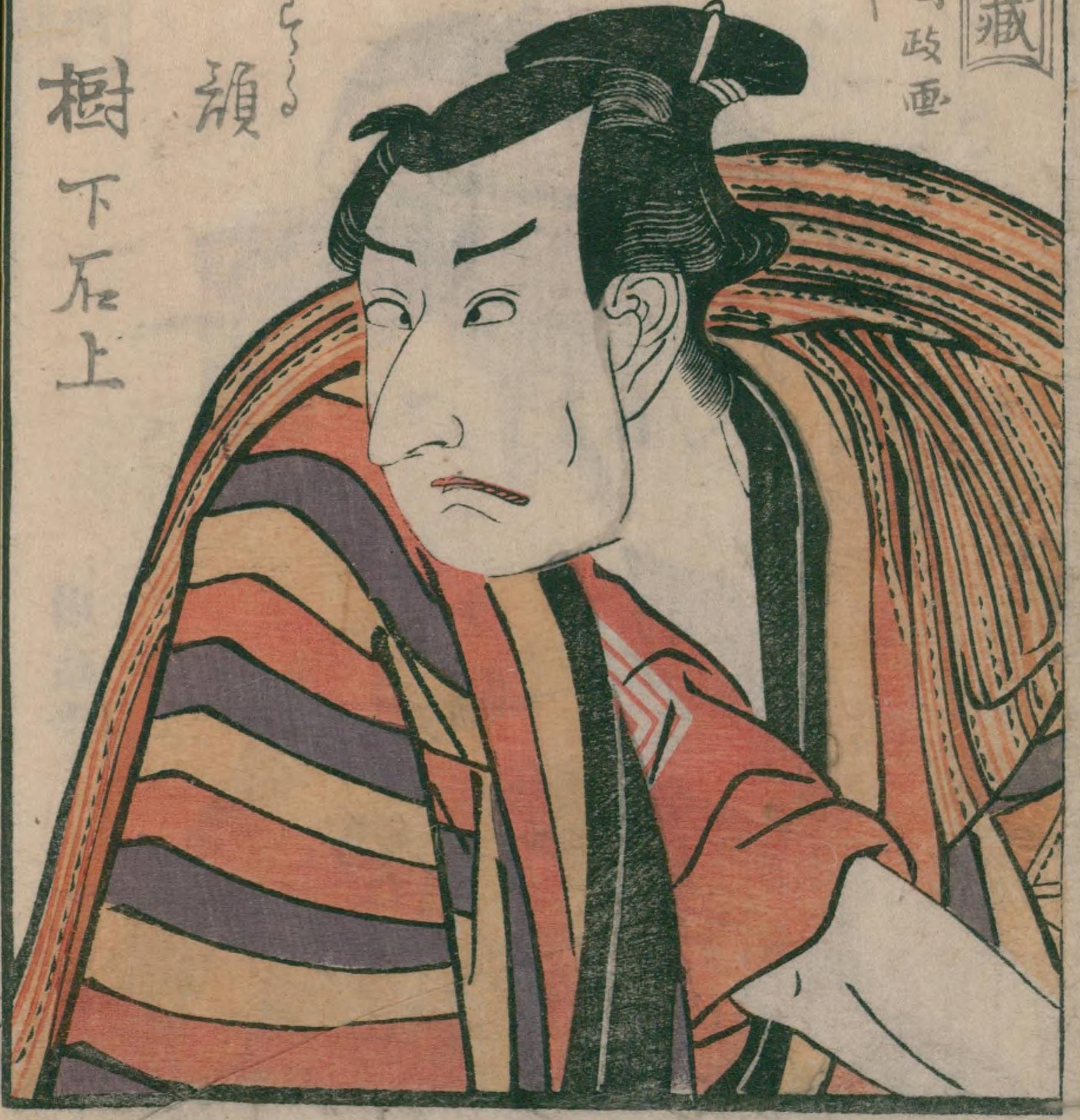
市川男女蔵

國政画

おもはけらく
いひ
ときのや
ら
初恋の
身を
替紋れ
ふさまあてゝる

頓

樹下石上

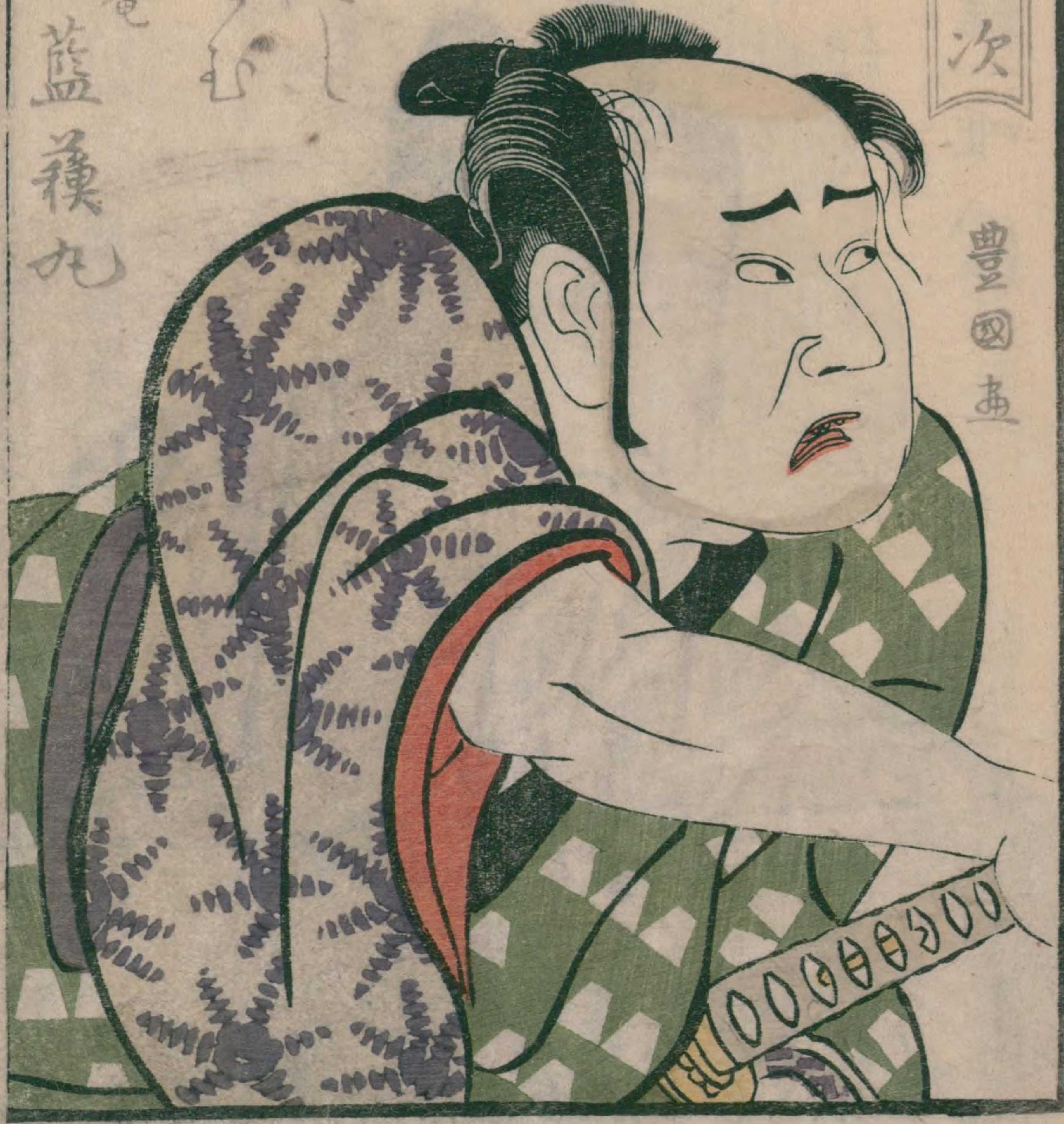


大谷廣次

豊國画

ふゝまふ
ちゞみ
ぬるく
袖の破
四ほうし
ころゝとし
さつとや
あらむ

鵲巣菴
呉藍穫丸

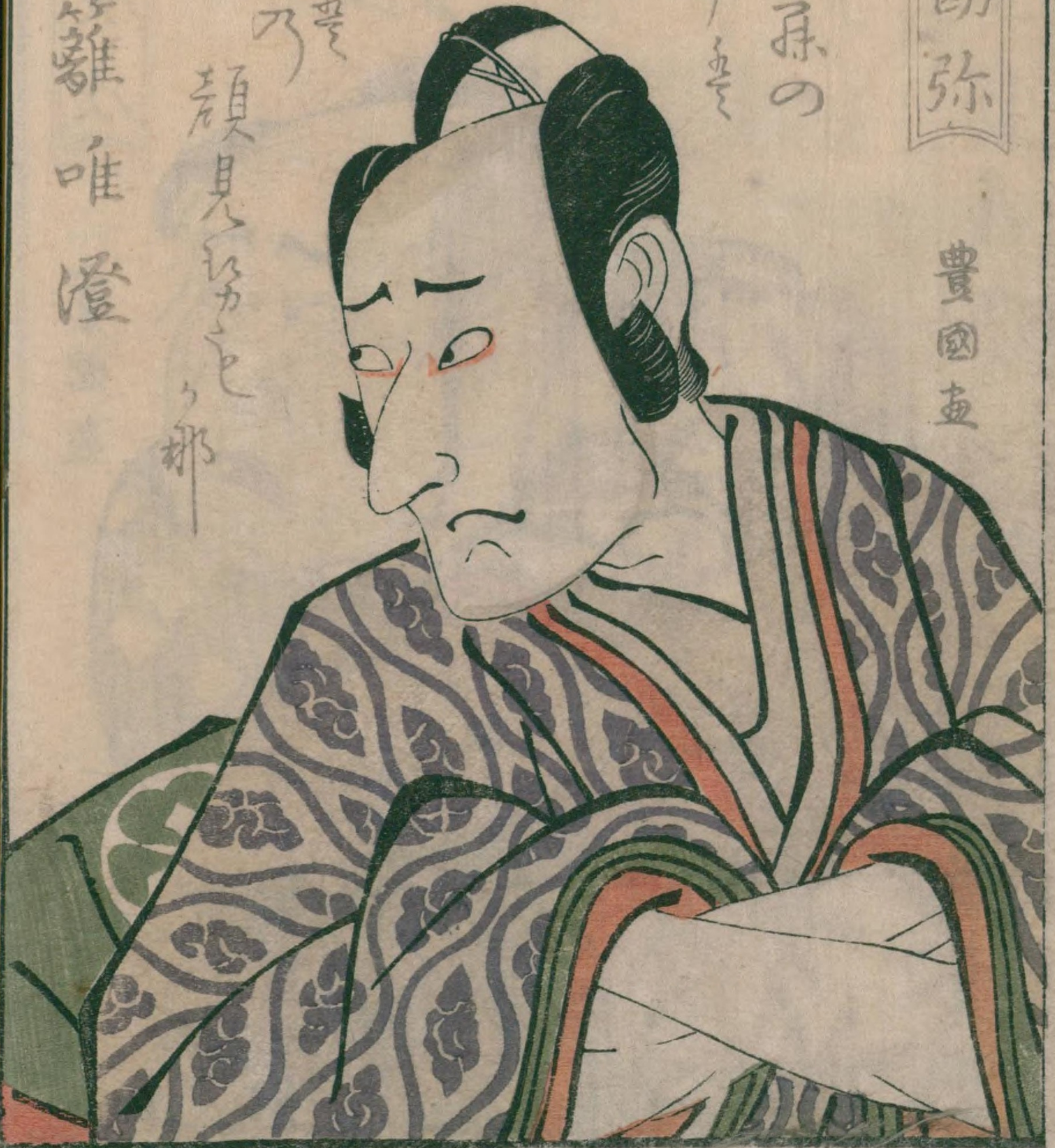


森田勘弥

志のひ来の
いとまも
とり四と
あり
男れハ
せんゝ哉きも
君乃
顔見せちかとゝの郷

雛唯澄

豊國画

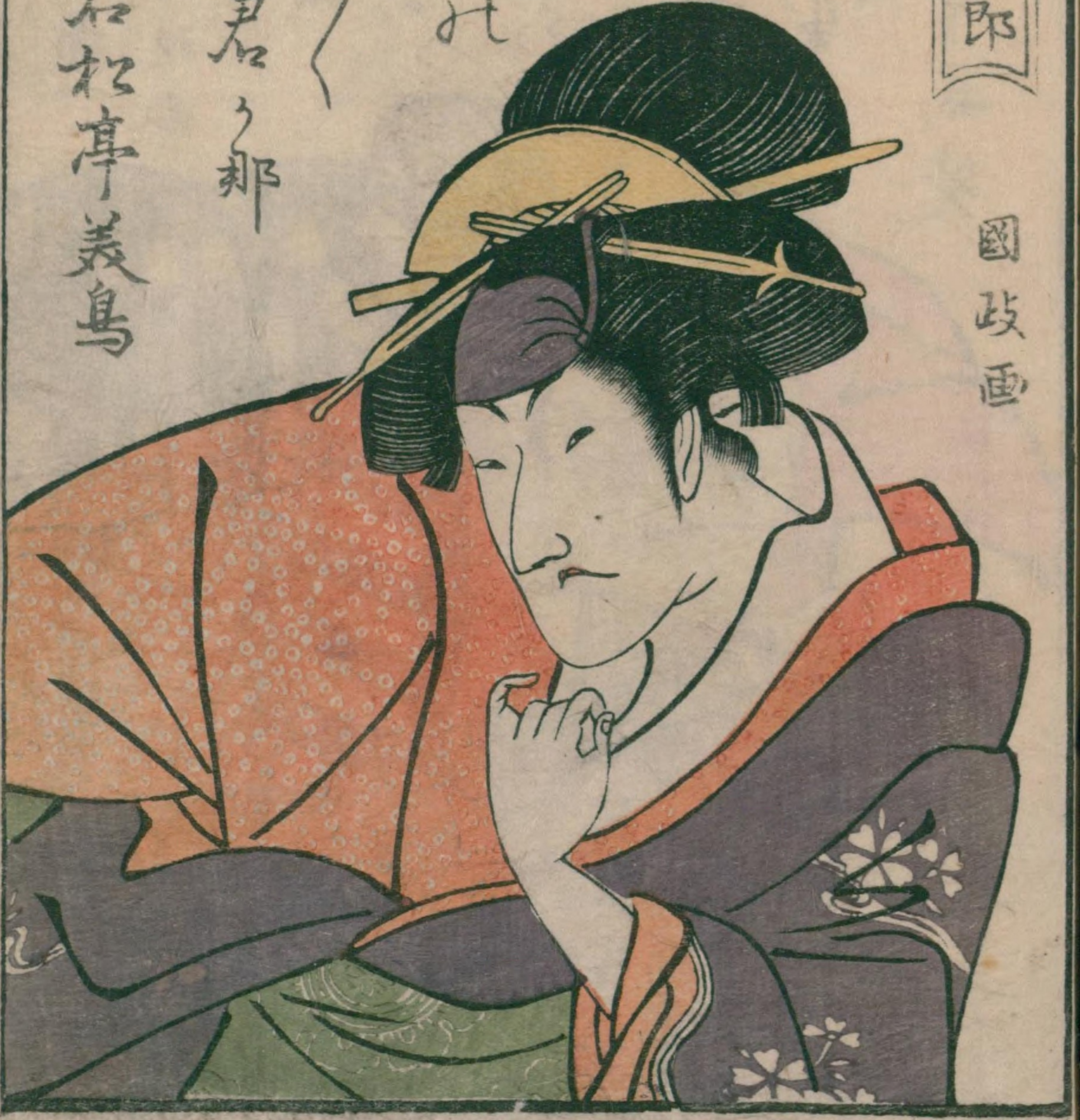


中山富三郎

ぐゐや
はりさ
あゐまり
そ
うち
中山れ
なんつゝ中く
落ぬ君の郷

若松亭美鳥

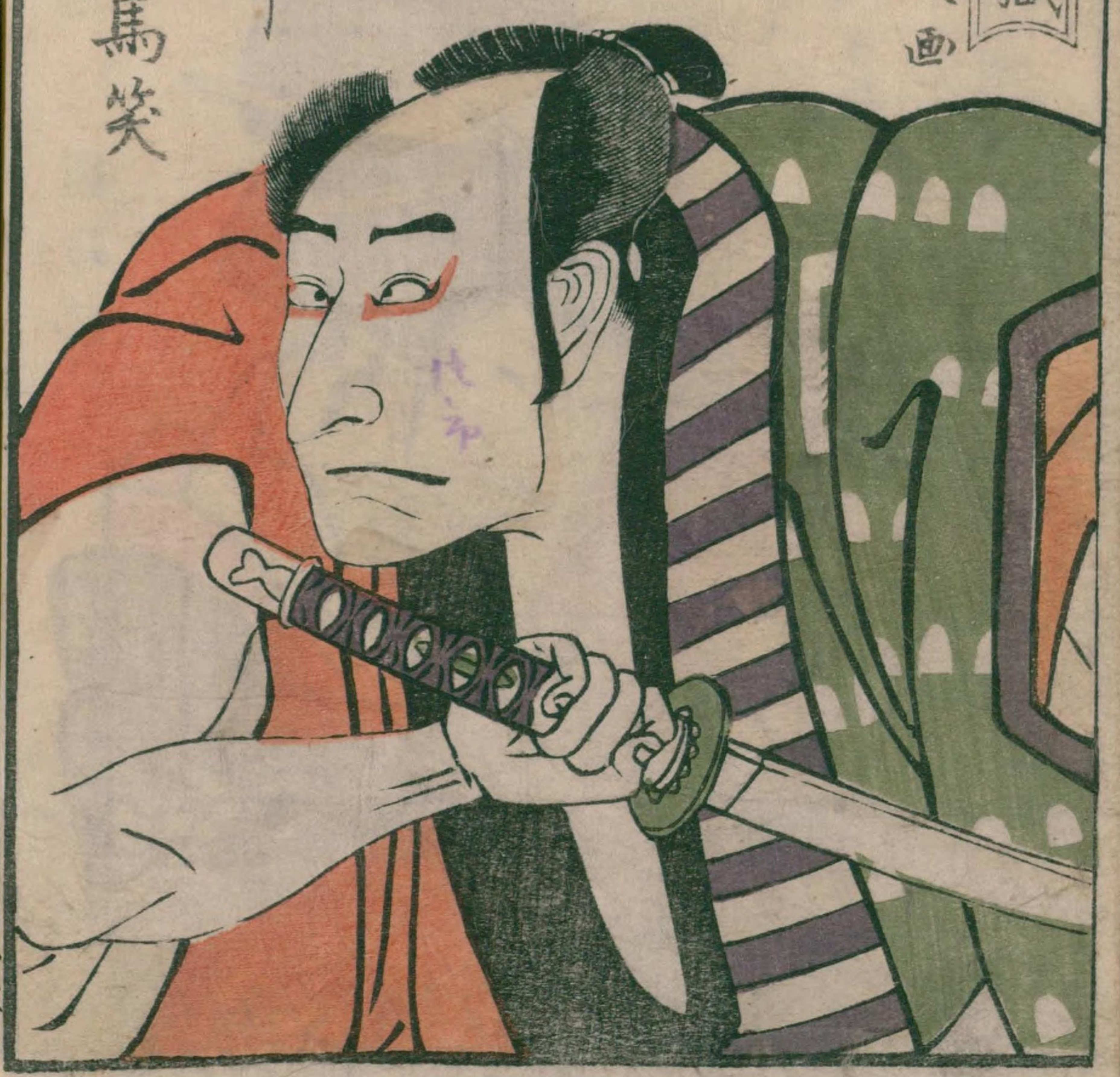
國政画



桐の谷門藏

我徧れ出と紙ちりきぬうきしさゝきるものやよりもしられお返事

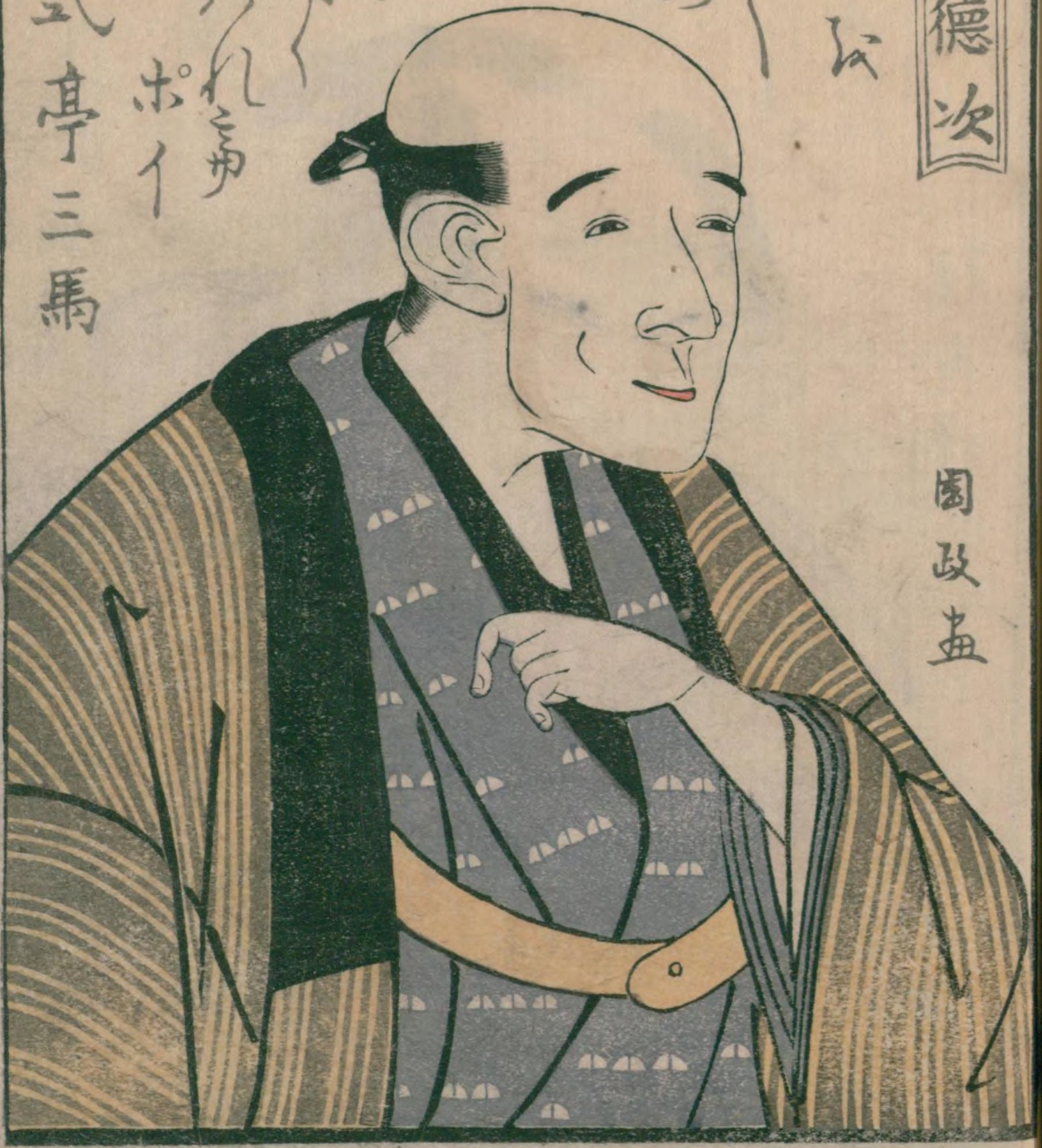
楽亭馬笑


國政画

大谷德次

腹筋ばよゐく毎の志のむ森ヲうか名を高くあらハれ為ポイ

式亭三馬

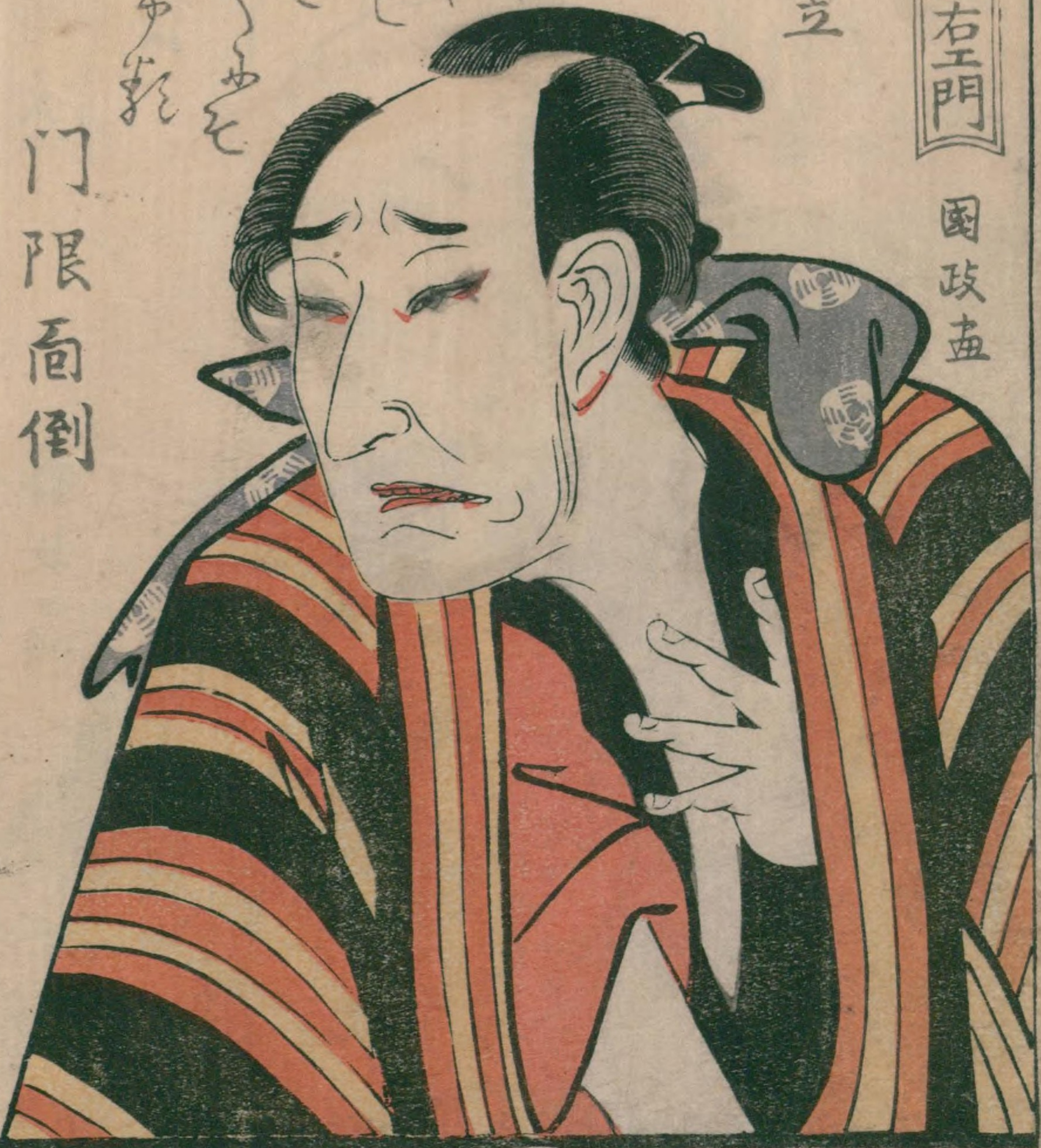

國政画

中嶋和田右衛門

二蓋笠
きせとむすふの神かけて
契りもかたき女夫ゆゑを
はかりま程

門限面倒

國政画

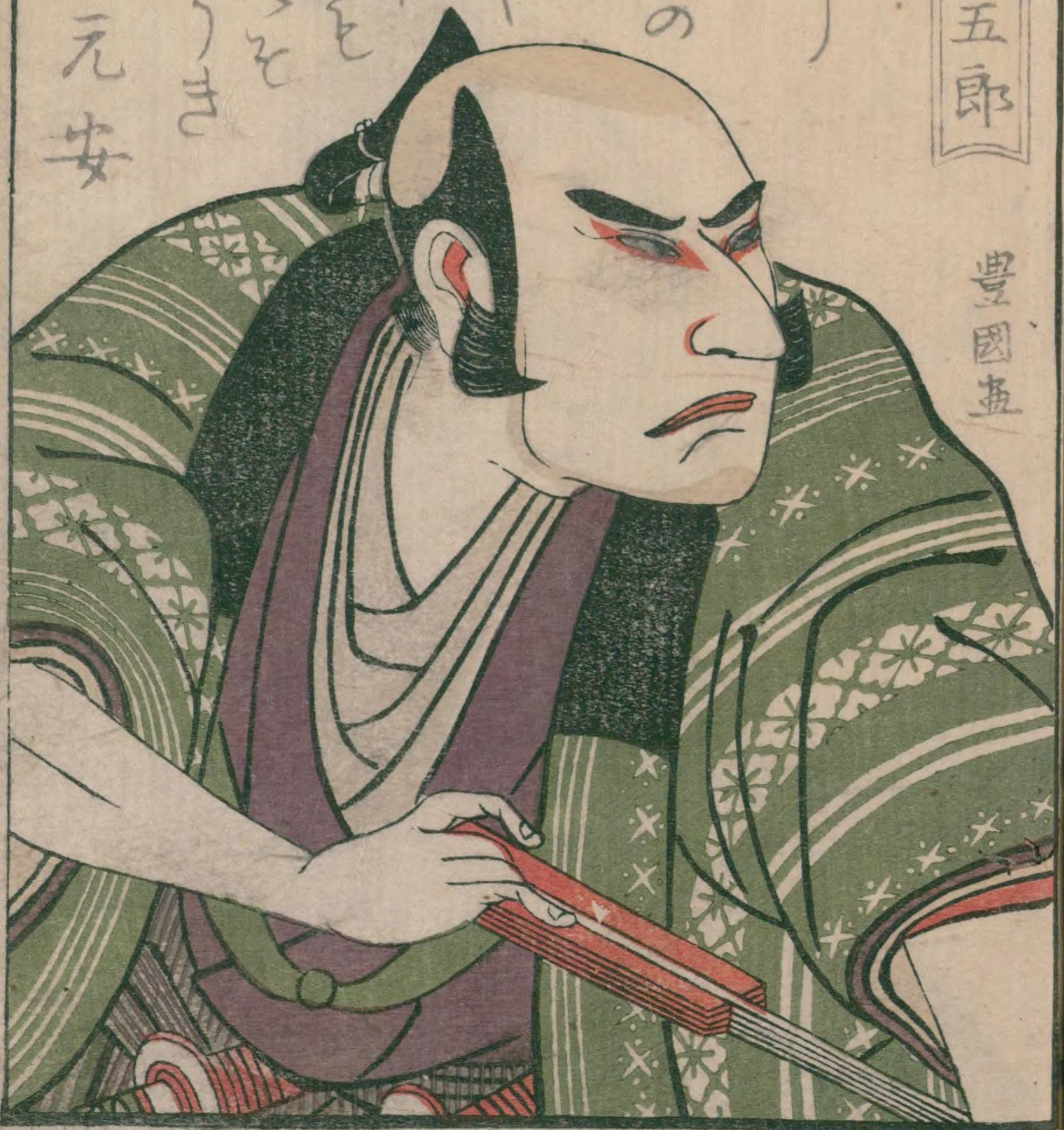


松本國五郎

今更り我
佗し名のかしら
まや
くあしく
かれくとも
そろぬそうき

綴元安

豊國画

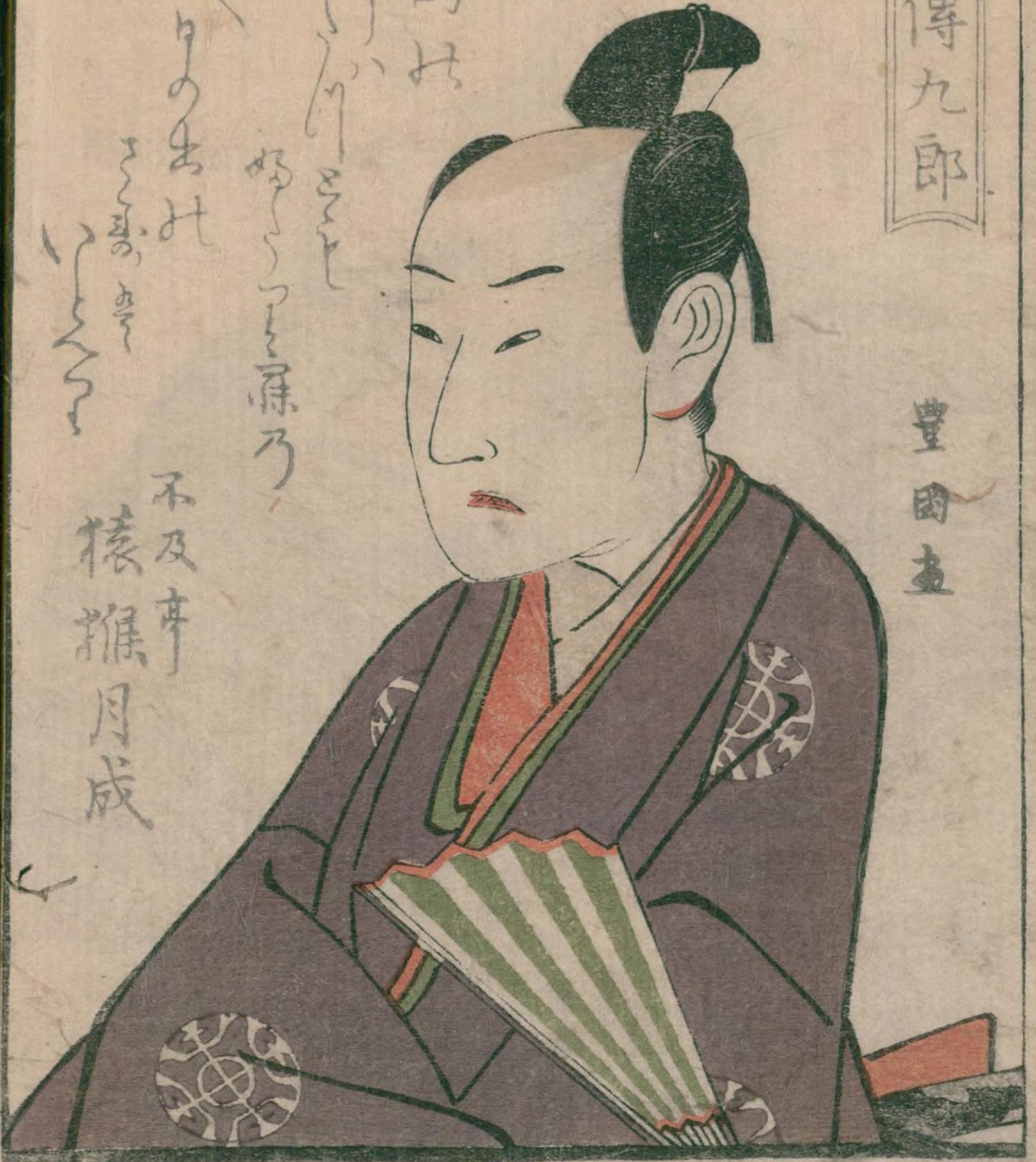


ガラス使用

中村傳九郎

舞鶴は
名もいかにしと
娘ふつゝ麻乃
孫て
日の出は
さし出て
いとくろし

不及亭
猿猴月成

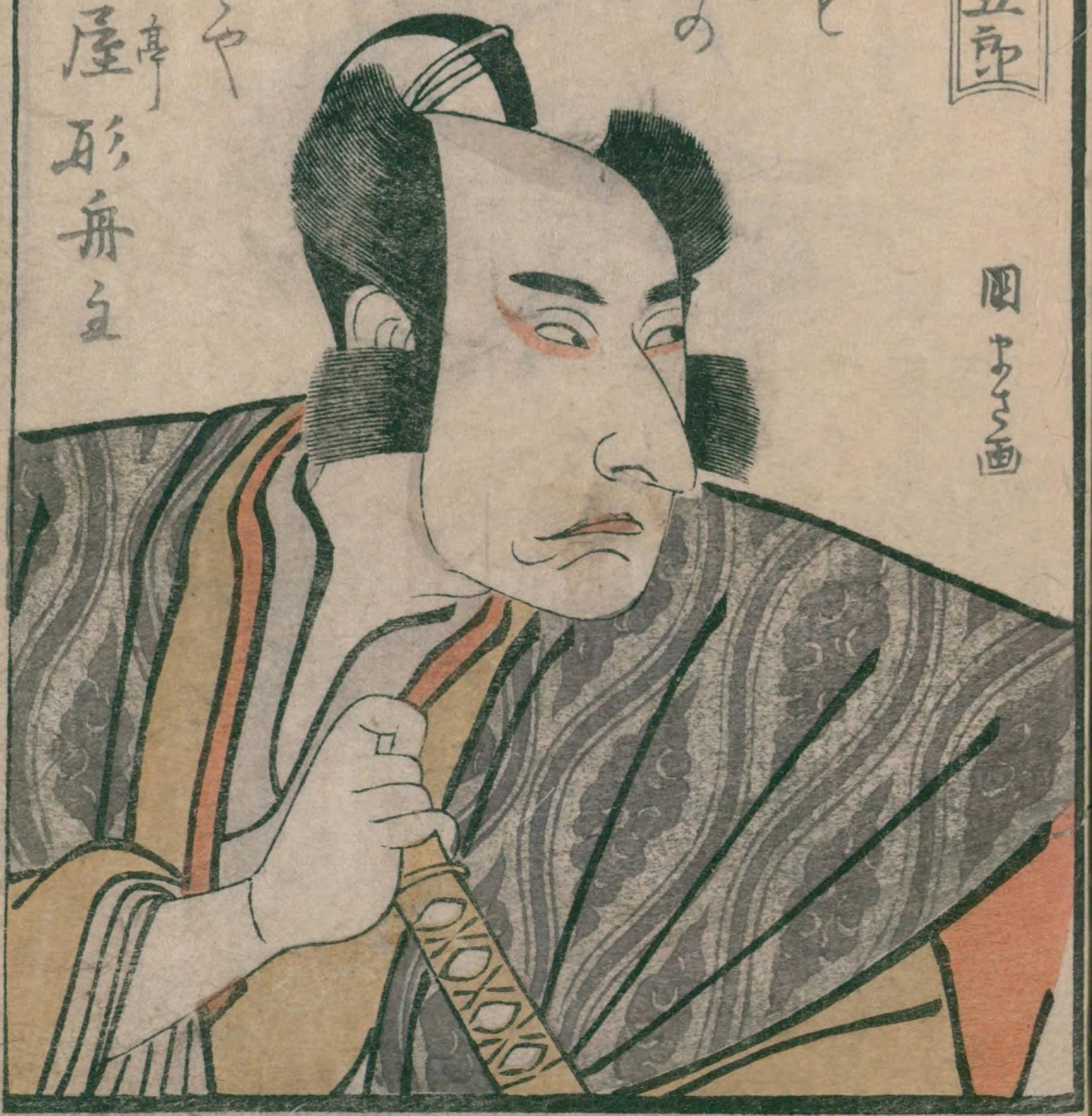


豊国画

坂東三津五郎

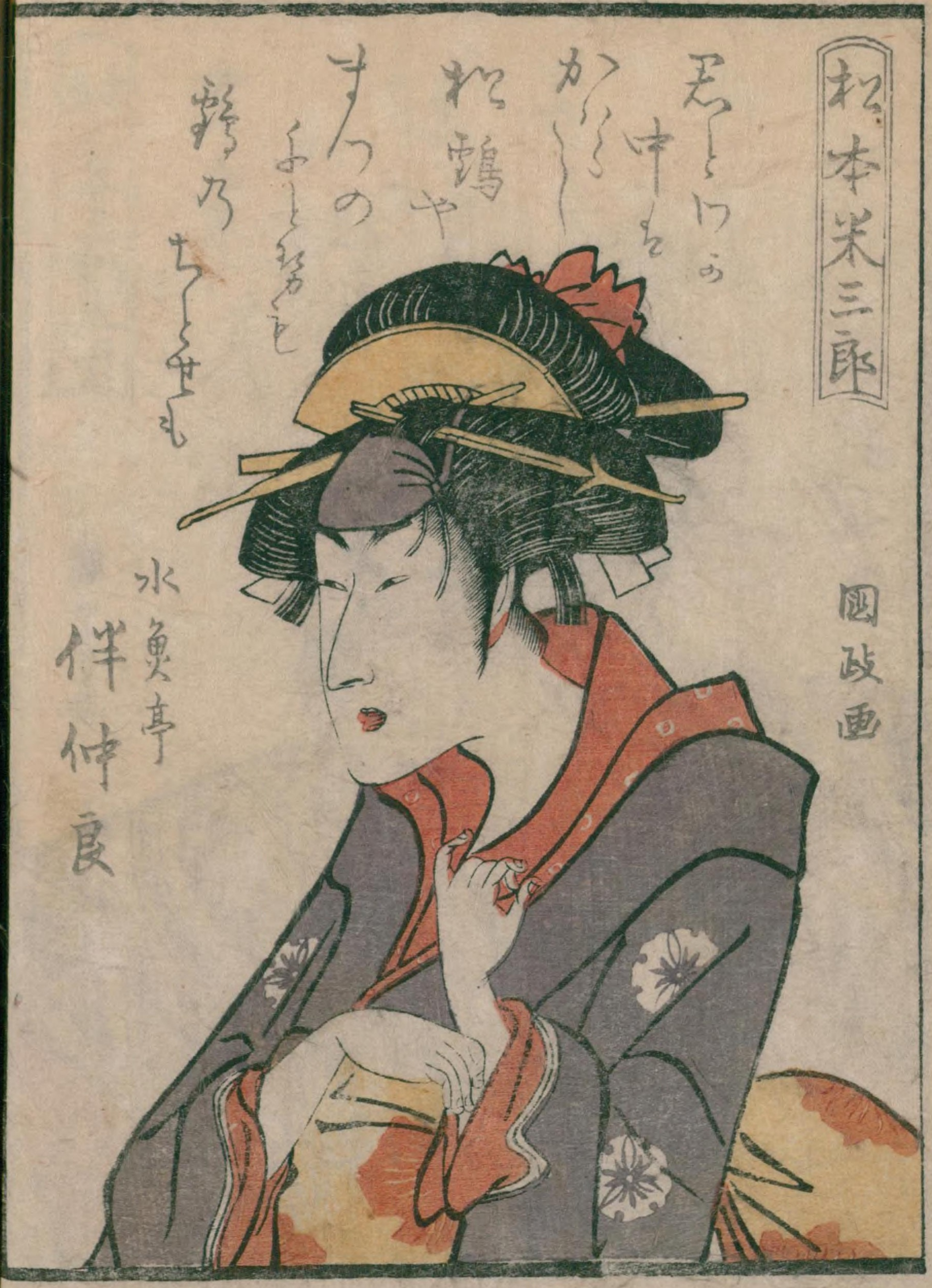
世のくゝを
かくす仕打の
悪人と
麻[illegible]しく
今宵
侍ならぬや

水遊亭
屋形舟丸



国まさ画

ガラス使用

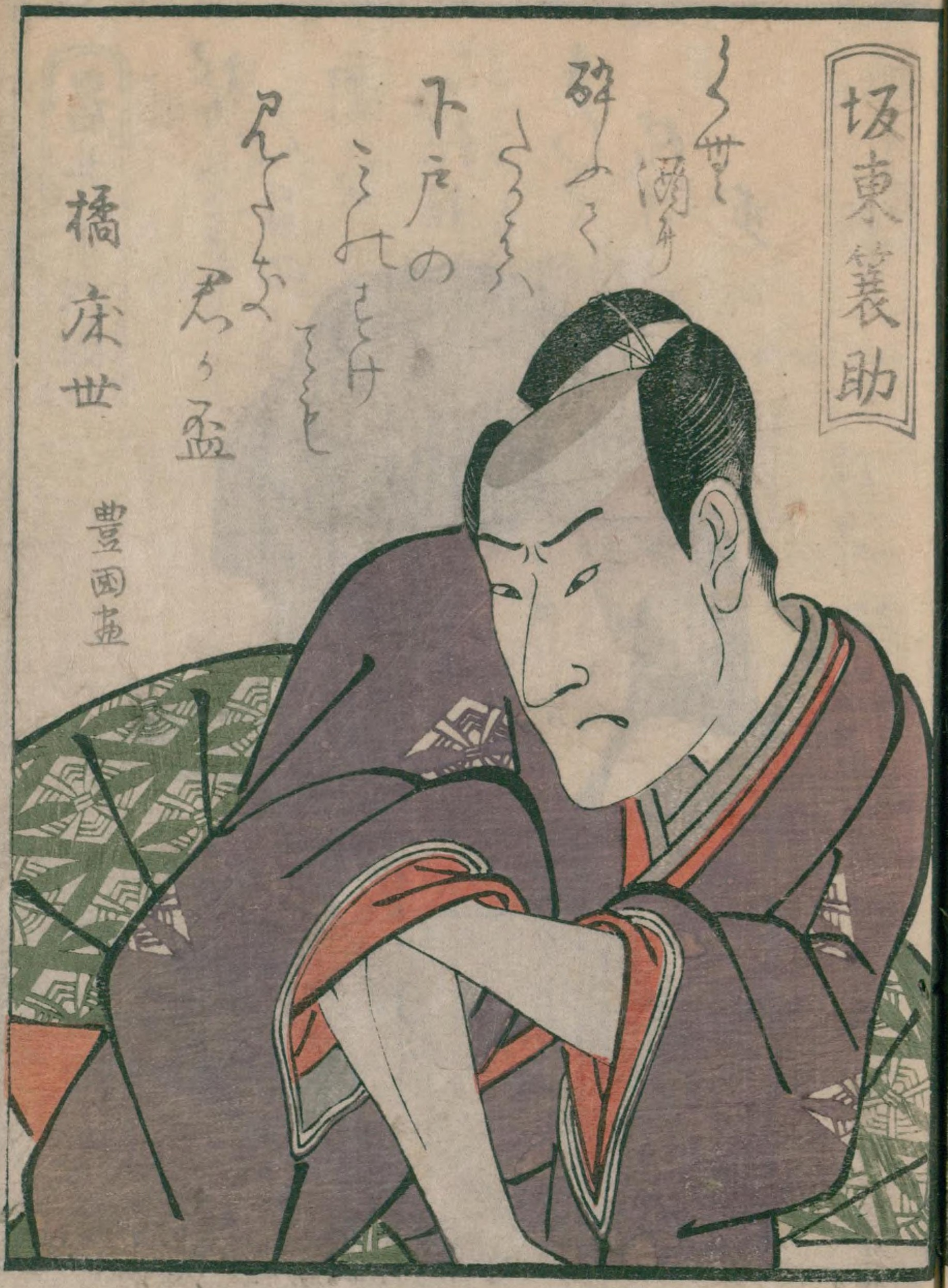


松本米三郎

君と代の中を
かはらし
松鶴や
まつの
千とせを
鶴乃
ちとせも

水魚亭
伴仲良

国政画



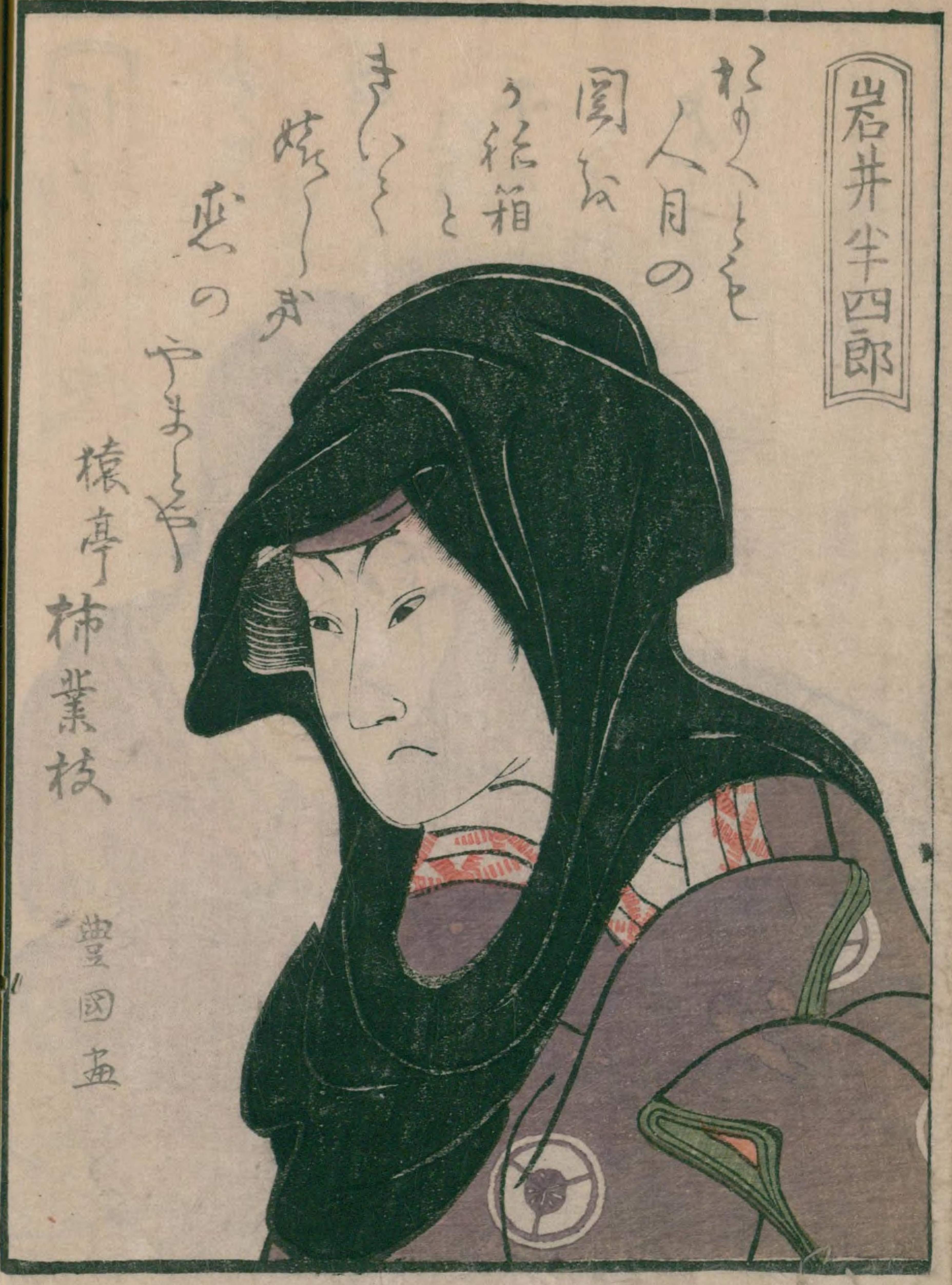
坂東簑助

く世と
酒升
砕みく
ゝゝゝ
下戸の
こゝれきけ
てゝと
見んともよ
君が盃

橋庵世

豊国画

ガラス使用

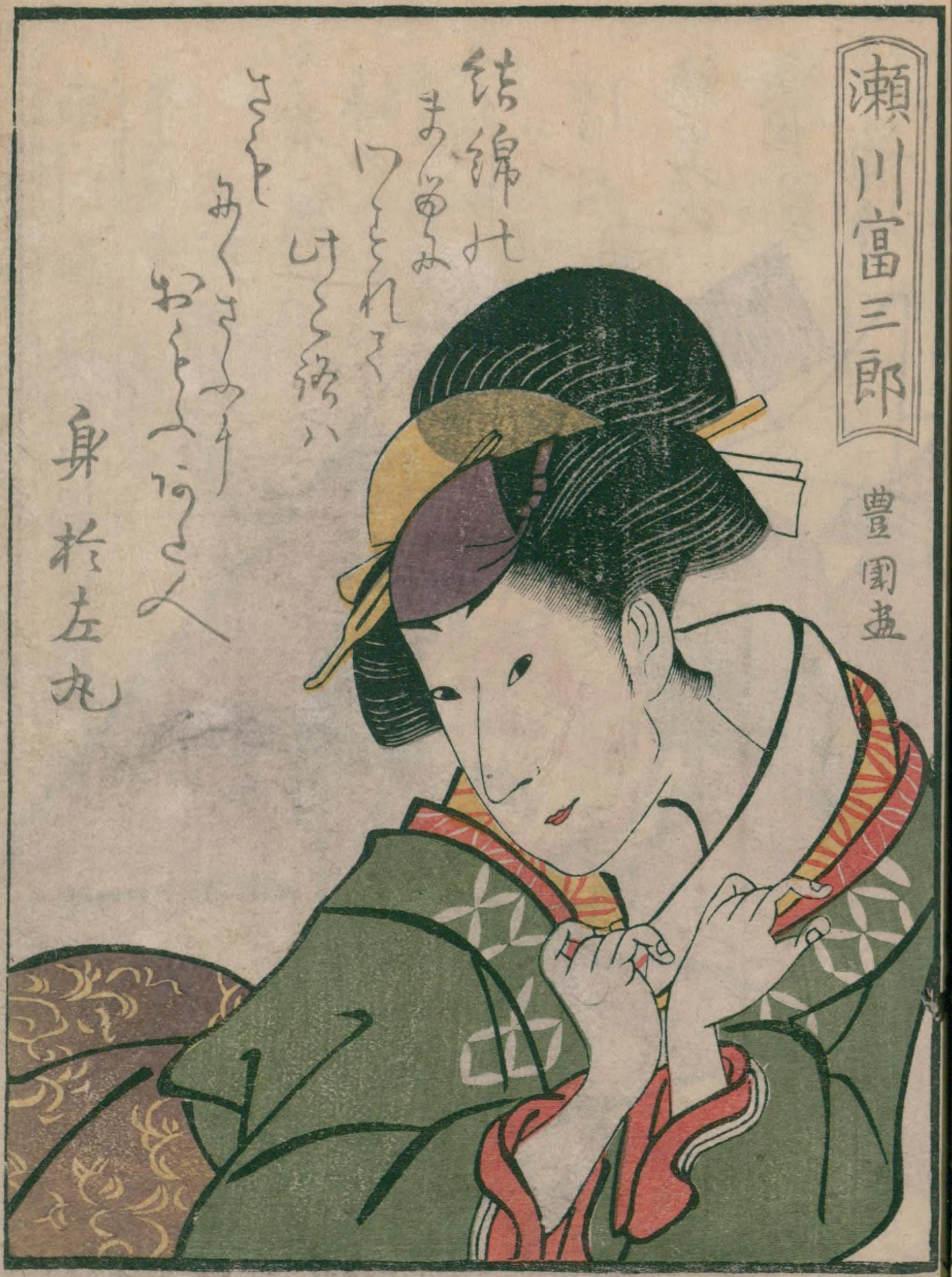


岩井半四郎

かくしても
人目の
関は
う紙箱
と
まいらく
嫁しず
恋の
やまとや

榱亭柿葉枝

豊国画



瀬川富三郎

結綿は
まゆゑみ
つとれて
けふ結ハ
さとも
みくさみけ
おとよみゆとく

身於左丸

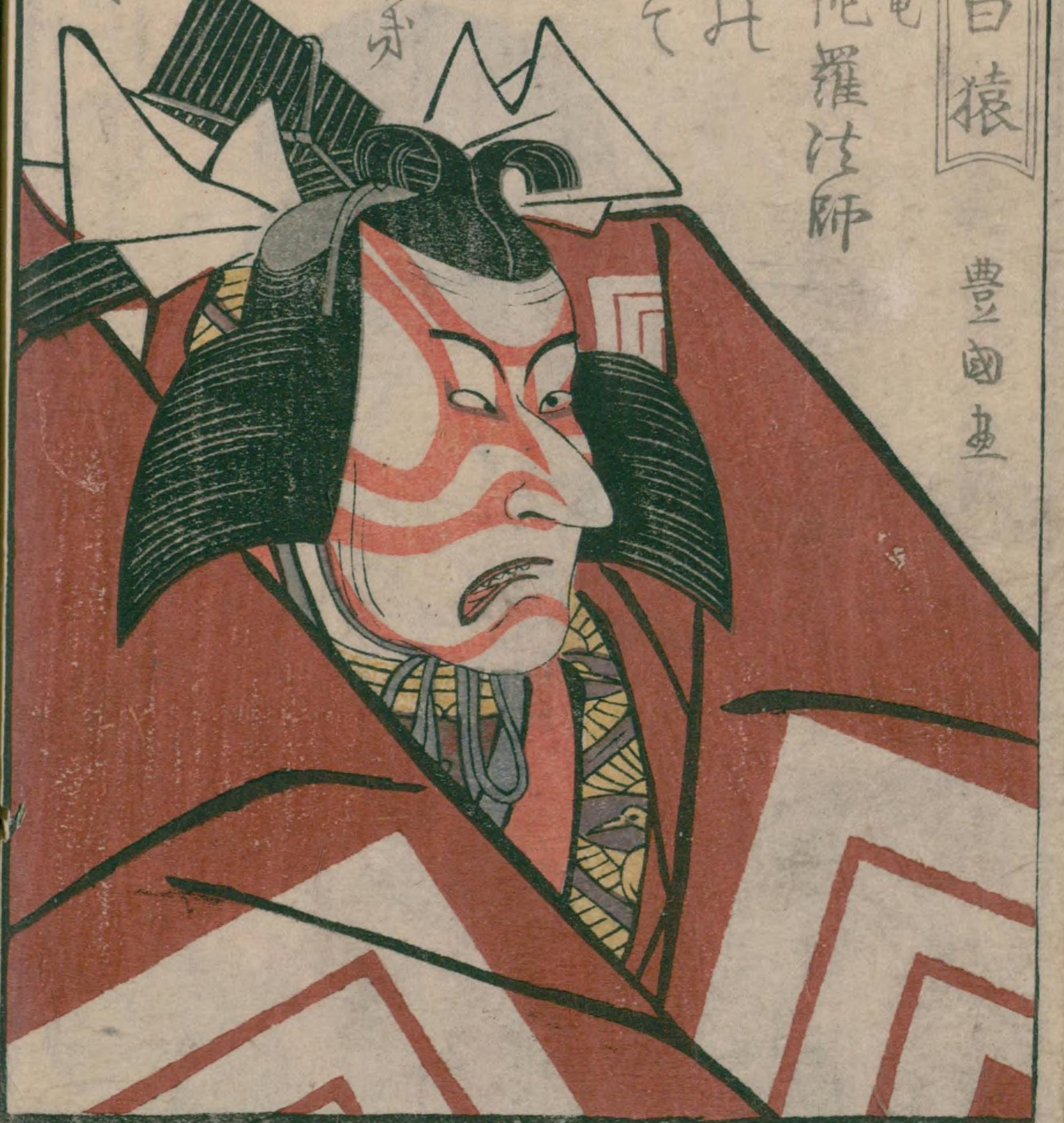
豊国画

ガラス使用

市川白猿

手繩庵
三陀羅法師

うき恋ハ
海のそこまで
とふ
いのちから
かくも
はなれ
ぬまゝ
海老の
髭男
身かな



歌舞妓樂屋通 俳優（やくしゃ）贔屓（ひいき）氣質（かたぎ）

徴 八文舎自笑

式亭三馬著

目録

第一 梅干親仁（むめぼしおやぢ）が芝居好（しばゐずき）ハ酢（す）と通（つう）ハ狂言（きやうげん）の味（あぢはひ）

むしくわれた佐節（ぶし）かくし親仁（おやぢ）が

當世（たうせい）贔屓人（ひいきひと）の評判（ひやうばん）を頭（つ）痛ハ一閣

試合（しあひ）さるゝも位附（くらゐづけ）ハ伴頭（ばんとう）の役割（やくわり）

第二　腐儒者の芝居好は陳奮感心な狂言を講釈
聖人の道行文句間に合の手と
引言をすると過言は異見趣向して后よの
の悔はなくても酒を呑太郎が無尻言

第三　嫁は聟の芝居好は二三九でならび狂言の仕組
にも合ぬ起承転合は詩文なが詞
の花嫁芝居きゝしひとは口上の
いひそふさへでも似顔絵を聟引出

哥舞妓楽屋通　俳優員負宰質

第一　梅干脱仁は芝居好は酔を通して狂言の味ひ
武蔵野の月は草より出て艸ふかくもなく三十一字
にたゝ称するべし川と佳古露が関するお大段ぐしまちござり
すべし川の流れも変りとかわつくノウくゆらしまつてせずや杯と
ゆりなし時代ふく物換り星移り織母日く盛りして
又日々に盛なる花のお江戸のさんゑいはしとの名月を
根より出て出根にはれ水道のみに生まれで金の魚
虎を糧となく目出るれ　御代の例なるるもされば

ガラス使用

大通連子がしく本田の髪のごとく心中まぶりと通衢に
羽織の丈とともに長羅や呑太郎とふかく生長き
二親の御すを食序屋の一りんよう四方舛味噌を一つ包んで
金銀ハ山となしく三櫓に腰て應じる者おぼえて居るよ
戯場の金主を楽とあらう大の浪宥なり親仁ハ長屋の後
園に別業を構へて名も鵜法と改家中にハのこらず息子
乃呑太郎に譲りけれバ家内ハどんどと川も張て白水
の流に施して石よりかたい番人とて抑ハ世の人にかどこして
負著の口をそろへ我も和合げに手くよ從万長持九長丹ぬとハ
この身の上なりいわゆる者かや此家にある人とていふ老猫も
去年しものゝこびし芝居狂を見て家業は代々の家業寶贔屓
に紛れ芝居を随分座敷が下手狂言を見ずんぎく大師まで
観音を岡のくちをまかり出でる俳優子も芝居通ひして向へ見ゆれバ
立もせぬ稽古ぞ好とのびして文のつき出舞へ友を思ひまれて
人の気のつき連中日比風にたてる入込みて少しのまた立ちたり芝居煎出の
数多く有明の一まわりすウアオウ〳〵となく先ききの彼の
噂ばらけ盛なりける声は聞れ声よ乱蘭の端へ明る中うる
去年ばかりおって目捷ぬ人ひなのがし妻子をはいひろげて世話する
あらぬ役を置いて書からの上役者身をも高慢らしく見せ
ちしまて住宅三段娘にハいつもいる女房の名を識ど揚けれ

向島の誰しが宴室(しゆう)もして茶の湯じやのきゝの又ハ稽古(けいこ)じや
かうと呼(よび)よせられ俳優(よう)くちらしまし中二階(かい)住(い)まう誰か來よ
て發句(ほつく)をむりに所望(しよまう)し此扇面(せんめん)ハかのんとよ書損ながら
此鼓(むく)ひらまさて夜宴(いひう)でうちまちふさらく年の波の家(ひさい)へうち
よまてるま志てぞぜハ八百いつもハ圓月(おつ)を見てハ去りしも
まゞゐりやさたて足もとのきの二字これ者(もの)そのむかしハ
京大坂の芝居役(つく)あまり淫(らくれ)の甚(ぞん)八がテンつて出さまま
げんとせつるあいろけ見れ薬罐(やくわん)などと娘の見しして雑居書(だん)の
織眉(くゝろ)もうあちれ嗟(さ)をのあ出してゐる又ハ掛く村世ハ云ひ
あゝもわしらうみひ村らの藝(げい)と今の役者のさする業(わざ)ハ古月
さあゝてんで狂(すうかれ)の芸でてんじやまんが才一行役としても人(ひと)で
もらひ昔(むかし)の役者といふものハ金(せんりやう)をとらずにあまもとさへすとくもし
末しや平九郎志やの才牛(さいぎう)じやのイヤ又魚楽十郎などとえんて
ハとんと生捕(いけどり)の二文じやとはうらかましにむかし芸まんなる
て云ぬ道(てうせん)を行ひれの川舟の方(どうま)あいめしへかゝつて首(くら)て
小口利(きひ)が今ハ雑中(さうきん)の云らみはぬぐひ向かふち遣風らも出
やコ」とふまつ蒔きらみむすもあき投されせいそのよるみ
いふ人ハ八生よの三十郎てま演術(えんじゆつ)をかちこむいひと鈴(すず)れりんかふよ
ありそ宗の嬉(いきな)ひ迄いへつだれ傳法(でんがう)が世の中く東西くとこんつく
金ベら舟がいらまい言らくむかしくとぬりとあつく書生(しよせい)をけはし

なさるが　むかしがよいといふ中く今の役者といふものが下手までゞござるの
ハテむかしハ芝居めぐらしひどくつりで狂言の仕組がかしけじや
又役者の藝も大舞で気ハ律く真ハ実やとあまりあと皇
なれども今ハ今の見物の目ハ芸濃の妻人などに犯されぬるより
よりくどきのまゝまでも目にたつそのまゝなる内室文
なくなるもんにて狂言浄瑠理のおとひへさも甚しく芝居の
藝ときこへ世話も當代にこしらへまゝくだるのそれの名人でご
ざりてや又狂言の作りもさのみや出来さる狂言ハあまり入
組くらひとはいふのみであるが是ハ又上でしくふのやら
のやらそのせいこそハむかしの浄るりや狂言本をよんでさが

よくひなかなんじやろ此まゝハ字はがよめ錦ども見解が
るいひ平田のまゝくじやハ勿論その内にも近松といふ
作者の氏神が有りてぬけめの付くやうにするのらひ
文句があるさかいまそれからの今の八ならひよといふが文
時ふてうまひ文句もみゆるといふさかいさうかもそれがいも
近松にハ及ばぬといふなくもあるにいなみ近松に及ハぬ処へハ
書きもの入らんばならぬひ筋を入ませまゝバむかしも今も
積なるはそんならハ役者もその道いつにも名人の昔
役者でも芝居もの見物に見せてらんば巧者ではなく捨も笑
なさるまひなる事ハひとおもやひふくろのうちが皆此風なんとしじや

ガラス使用

艶事からくと自然生乃年老氣質を脇へやられ理屈の
ゑ
大お錢亀息子の呑太郎も今は業が來て見物贔屓も
行ぬ俤終りはバすゞ川今日は見限と堅からの隠居がはやるゝ
連中あまく堂を立ば見世の手代まで又ひめの下さらくと騒立
花の儒者の帯を尻のちかくずらりむちうち員の手むすび
新形の紫衣裳にさら匠の手ぬぐひを肩にしよりの脇へ
ちらと大膳正の意り立姿みちや本夫のまん念りのやし
ちよせずどぞ見られりこんの合羽猪首ちよふ芝居帳場よりはし出
見世の黒羽五明へ呑太郎が段を丹念に写しうるをお座き立
徒あらくアリヤ〳〵とつ火を切りかけに座敷のめし〳〵花が

太鼓をカラ〳〵とお出世ハコリヤ三番よ打出す蘭を出しのやうら皮を
ドンく書かひてわづく鐘をカラ〳〵ときこ見れ喜法を書ぬ母門やと
志ちうま出る傳市の長松丸でちらんとせん樽ぐ屋合首箱行
又へ提く出しく出口を戸を出れバ明日ハ又が出まもぞや
く老年ハ又へ猪ろお尻しさうしと出りくほうち出まを着
有の羽織ハ筆太夫のはへこ茶の世話人のれバ筆ハチヲボ語りの中く
割きておゑーテツの抜をかうまんにヤレ利ゑどんのイヤ文茂どんの
四郎どんのと三条まで呂といハぬ太宰人ゑ喜納墨譜むちゆう
くちゃうのあぶそう上へ一沙汰より取へ中へ向ひ何をもいへバ飛けり
と出たるめいちの出世の呑太郎かうして飛んぼ

ガラス使用

の點法(てんかう)に向ひてうやうやしく手をつきさてながらみなさま役人衆へ申上まする
すれ數も深更(しんかう)に及びますれば芸躰(らくたい)の仕舞のつれびきまでおくの一局
ゆるゆる御休息(きうそく)遊ばされませうならばねむりの中にとりもせぬ目の玉を
白く黒くして猿の咽(のど)へはゐ入ころごくみんで見てゐられればあん
きよの點法かくゝる会様さァいゝまする今宵(ゑ)時計(とけい)八ツのまく
ぎんもち今宵(こよひ)は寝(ね)るがへゝのう申さひや「コリヤ拝いよく唄目つゝさ
唄六ツの達を相(あい)居には遠く芝居へ行すむくはへてびよ一番一番ヤ
付くとさうらふ「役人衆の仕舞細(さい)道中(どうちう)旅仕舞ますでござる「左ようならば
唄六ツの達を相客(あいつ)にはいふまい「まづとかくあゝ「其の一ツで「拝「役人
さまへ「イヤナニ家来ども身につゞひてかゝりまいれ「と「先へちせら拝せよ

下座 ドンく「お「ふきやうきさあさの拍子をへ仕上と面白く洗湯(せんとう)ぐさう
ひとまる書殿(でんち)上りがましろを付みと神樂(かぐら)までさんて「ふかなかり太鼓
中のこゞもるひろてとむ世子ふくらしく拍子をされば縁え
の頭丸(こうかう)さんのさゝ宿ゝそて蜜柑(こうん)の皮へ烈裂紙(さきさうく)をむさひ付すると
紙所のご「ゑさうひたの間あいてりを行付みる「ふろあんかあん
付乃けさとゝとかさうき逆さん切へ中通(なかとほり)り紫樹子志さく働(はたらき)の人ニヶ尻(しり)
ともせおらく拍子し松風まんだらうよしかく栄しかく
狂言総本家附くとよむく何く舞の座へまゝへ中仕切
の幸まくさんへまり拍子と二階よりへ床乃間をとせり拍子
ば人衆へけ姫とんを役て「まくせの仕舞也手拭(てぬぐひ)枕とうべで「まくせの

ガラス使用

頓て又とお中働の下女らしき者ども八中二階へ上りて枕のまくらが
ぬしども寝へ人も寝言(ねごと)のはめ詞も有りくさるがら鼾息(いびき)へじやくぬ
ぬしらしき者ぐらく寝静(ねしづま)りたる時分ハよしとやおらひろん六果(ちやうち)
なりお次代人目を忍び三筆ふらく夜着(よぎ)の中よりむつくと
挽き傍(ねうり)をあらためてうつぶひ足ふおづくとはゐより戸棚(とだな)の内分
なんかくおり出を煙(ねや)しの一家ある風抱て挽ハひづれ足アそ正精
あまも鼻紙かくろうまん舌まと首尾(しゆび)よくさがすれ大願(ぐわん)成るらうや
かじけ嫁へ足ふちぎくれ大いその廓へはうるくなすぐこの二合め
てんきうりてうい楽(あん)の内すづま出い只切のは一家あめ門さふ人はた
けにじちやアなう嫁へアさりなからいて大へそ是いよやどのたる二まひびく

飛(と)ばさふの俳しハおのづく二挺立(ちやう)どちらが淀ろうと楽屋(しおんぞ)櫓ちよとひと
家られてどぞいてさんざんがわりさすまりのござりますと見世しく
ヲ^昨日のむく華ひ家にそば切らの蝶どし此門へ参るくうしまいて
エゾそれなよと出そく白ぶく志ろうをよ「田
ちゞひハ中田甫(ドリヤ)一ちゞまとうきがひゑでかけりんとする
不に補市の俳斎後(じろ)ようさんで出「母かすそ安のでは とけさおえ
那へドリヤ淫進(ちうん)といひすて挽くへらんとするあのがさをうとく
戸棚(とだな)へかんかうりうちこんぐ錠(ぢやう)まへヒシめんぞうを婦て喰けを
志(しん)の世くせのまて「何がなんと」ト引くりのへると俳優の
八ゝ来にれ浪文(せりふ)の立出り俳優けり別して母のめうそ藝(げい)で

ガラス使用

篳篥と云ふ人様の番に試合せて附けつけど 俳優は一おもて「ダァーン」とぶちこむ様に打かんと思ひけども いつもなるや一足も引かれ「アイラ」中ござや今俳優の動作のを権に返て表のび出されず得よ己も其ち西足片歩みて人の田須ら付まもせよりかく怪しのみきめしやよと云ふを切りつけごろりくくと家門に連の人来爾とんで出やアく太八稲の足ら人の目を一周し捉西ン出のでん巧め見じゃ大体見殺さうなのがら家法とぞりて一新姫後狂言の立あり夫々然利するが感せらるゝ所なきにおすろ行く人は甚以て今は何が衆議其通がる西を番し無賞として明月より俳優職と何とつくぞ乃ぬ如水よりアく毋しとるや此無秩序も忘却るく狂言枝葉云ふ人をゆび殊芝居の現んぽてくるなどと戯義に世俗ら云人の洞などと云れたし三指九指ありがる洞蔵とら洞なきぞくと一乃かえまず流れて流れくる去ぞく三府東西の化粧の水と令の主人の三浦が白かし里そろる今世一間の見へ参りいふ狂言好かれべきくなんがうてるし乾物くろうくくの

第二 腐儒者の芝居好は陳奇實感ぜる狂言の講釈

隠居下の本舞臺は三間四方にて天上建て揚障子の物まで記す女のあらん中働の拙さんつまも二役三役と割付儀状を極めらるゝ迚も一代まんとする者実へ何とも本居を張て奥の文云仍る条件は俚俗なるのみやとくぬ後ロ口上たれと云ふがよろしと 俳優云回へよまず不申せう

と言ひなりまで早速に文言も極りし旧例じやと云ひ出の仕来たり

お湯、お給仕おてまへのおかハりも出遣入ぞふヤアリイリとおなじとりまて

一度くらゐ大全狂のかざり付の際とハ幸かなぶえなくて或ハ通りから

おどおりやうぞハ同士侍と言く我門もサア ござんせへナアと云

なまめきたる祝儀ひらくまのか行義正しく切幕をキイリと

上てやよまれ只今東丹前の出おござりまするとせら

娘の前ど粧ぎたる男両へ立つきて来身されバ嬌態宛とと

おゐる門き ナニ丹前波の出方や足ハツトいふく立上ると傍

の母ぞ イヨ 役者アリとかめゐる家例のほしとぞコレハしようぞく

イザまづこのまへぞどく足を揃へ歌別まで毎ゐ散月しく

挨拶相すみしだいに直面三重鳴物にて大鼓三重その外かけ声拍子揃

揃て外廓清搔といふ賑やかなる拍子にて中入のよ

りの芸人でござりまするも能なにても替らぬ唯雑題

つらね付まりる千中にも七つ三味線のはいてて出してとくくと

雨風揚とことせ指ひきし打とせく太鼓まで太夫も出語文イ

みずくさま大音に唄ひり声くカ系くとて見へ七ゐんとして

急に宝打とれきなどへカゲくと中とせんくかをを出て中く

後見の上着のハ目取のお肩とせばどさをさる附びきしの引合

が遠てぶびきしまるの仕出するを路次のいくきを唄付てのかハり八百

屋お七めハ恋よう引合のさるひき事なる事恋くするかどふさひめしれ

せりと申す役人は門役さ。足は門にて名役しまするとかゆへより
足揃へして儀式まれば手のめが紅鹿（しうえん）を云ひめのじやまふだん念ひ
束して飾ひ役をあてゝ見つくるがよひと九への言付まする事ひとつの任
方がりはあれば大かせきを言ふコリヤヤイ次郎兵衛ひとつ家来（けらい）ののがざまき手へ
ときろくに言ふてと行て手よくいろいろ又拵へさせこれへ出し
足は今友の持ての母親が持つて三味せんとはよけいじ茶の湯では
さへ茶の三味せんのきてみびまてそと先に座敷で梅桜と茶の湯を付
二百文五百三十もまでお客があるぞふとまた其上同じやうにいける花を
婦人小もてひく三百と三十二百三分二ヶ五三下二十三毛外に出（ちよさい）
のかわりふじやとろの宮の欲（よく）なが得して帆かけ舟に掛（けいちくさき）

の妻物だらでも新造（しんぞう）の目からは光る金出して稼ぎ又は宝を金で
いふ其上の陰気女按摩（あんま）痃癖（りんぺき）針（はり）などの持（がう）などのよりどりとさ
らしてござりませ私がさる名所で見出して参りました古人雷子（らいし）が
朝夕（あさゆふ）のざしきにお出し此硯（けん）をもらひうけひたひ手前がよいやと直新じや
と目利（めきゝ）者が申しました今足をとろかすまで古人（こじん）路考（ろかう）が硯箱
でかんざし鼻紙（はながみ）じや表具が余程雅（が）にて茶掛（ちやがけ）みなどこらへなどござら
すれば又お挽（つん）のかけを売（う）るとかけられしまいには金て引合金七
両二分着代りやうでも下直（げぢき）の事とそめてそれは好（よきこゝち）のたれおしあはせなるひ
きんかわ婆が逆立ってやつとしての人を呼び集める古物の得ちからも粘（ちう）
人のかくしてとるさきのからやらく絵櫃（がつびつ）焼香（せう）して孝孫（かうそん）れはお画さるへを

ガラス使用

礼拝するもあり我祭するもあり町中揃つまりて祝文さる酔せらちや
目出たくともなる松のざんざうしふするの変りその為今さらに此甥
の殿に切抜たる奥太とらよなのみがたくりかしだろう経書の道のぞ花たとて
腐儒の命に去つて主まん小説字彙を傍に唐本の垂奥のなるの
先へ出さらかりて詩文は盛唐の中じや古来は楽天を見ひさ放ばん
ものは俗じやとこえがちまをぬるひ顛倒がちなる文作りく
自が氣まては柳子厚韓退之に挑灯と草履かさ甘るくゝるの
からゆ唐話纂要無用かゝり出してスミ手ヤンクなどて唐人の声
をまねて己が殊持らく後にさえをぼいて棚へうち上て抛ちが叔父も
ある意の文言じや役者論まきも程とが有ものじやといはせの

御抜相もだなるもうる土下ためにせる長幕やの口よら甚満かは奥へ
通れば例の立居ぬ一別以来と見へになりて立出り頓て客気乃
御見若労にねりもしくはあ文字も付に寄渡おきさふもの程と
手より支度酒が肴さるが是とて例し山葵しのかゝりも例乃
ごくふ非事ぞくなれば蘭陵美酒鬱金香玉碗盛来琥
珀酒帝へ酩酊席を乱さるをゆるせなごて忘かぎん子
香も暗りの會讀でも初るんまで隠居おむかひて和漢の
古文を無用の類書ふかぞへ出しているもの康熙帝の
御製さま人間を戯場に比して日月乃両幅燭二笑人の
歡後聖人は混古文師賢人は和實差氣古文師はいつも中ド院

よつて勇烈の武将じや乃好方仏といふ事くあるがアリヤおどけと
こじ付すぎてこれらの事をわかるといふぞやと知つて風を示
まれくこれ故一世を隠元といふ夫婦を学ぶ度の居の身
ては天地一大戯場と相願る口まで志をとらさ孔子の
詞よろ居宅は草芝居に等しき者なるは知るにかぎりぬ和せ
さるを知るとまてといへまでさらにその事らに役者を称をせるる
芝居をさへひきたるの好らうじや役に向後は志氣が必く
芝居ひゐきしあふみと額口は筋立ての異見隠居の咄
法もわからずして何の図ぞてまやかしごとまのが芝居きらひじや
かといへる者抱の趣じて好の事を図目かくみんれべいかからしれた
ならひチト又芝居は淫乱く刀称し又は歎かる事らにつらなるよふ
でもなきひとは　イヤ〳〵不侮がこと孔君子何如して戯場を
関世氏皇小人の好む所にして假にも先生の居を学ぶ者有ちか
はく芸は我世にゆく魏晋唐宋元明六朝の小説を
関むれば自ら芝居ゆりて三経一史乾中左國史漢
乃四部共に交互親も不及相云綺語と賛佛上
戸の諸文太が盃と詞を書て津ぎを天子に辞す事れく李
白一手詩百篇我は異見數百篇三度諫て用ひ
ざるが時は身退くの理是とお劇まての大出辞と歎れ其
優拮の傾法て立上り難き有九戯を行見つつトと詞の下

よりの几太夫芝居出勤の詞文句を引つゞきてまへ噺声色をまね
コリヤ〱吾太夫節その辞とれめをくらべてかつ義理ある雑炊をくらへ
甘露「うしこ遣りまた「出け「ちアチョン〱と摘みまをまを打
ら是ハ謹しや声色の芝居ちりユリや気のきゝひとまへ出るひまく
ちらふすいはまへ男らしさと人まてら夫ハ芝居ら一でその狂言ばかり
大でけく

第三　嫁は嵩の芝居ら指好ハ三ゝ九度よりを狂言の仕組
其ハ実まハ常ハ荒くなんくるせ辞の詞文太も幕や其弥門
ハそくめられく道の芝居指好含徳も遍ひとゑ　りく唐本
の小説物ら揃ひろひ節の狂言を作りて八五十ウ行らし案

訓義の會見を篤太夫といふ人あつせ南郭か文集徂徠集なとから
案じ出して流行せし故をもつて外良賣の借あるといへば驕
取ハ煙管の殺日常盤津の語當本の記　如利安倡兔
ことを著して門人にまなハせる程よまよふエイトウ〱と出
稽古のためまた入つし薹上ハ此村より無理狂言ら稽古出
又家義浅澤お親中以とハ非我らかて文句の事ましき
多くさまあることそ案の花れ長幕や親子もとも悦文
て毎日〱より合て芝居咄に狂言ばくしてのうゑ
うゑれ忽ちて連中あつまり志のあつまりて喋法つゝく
たいハまる悴の几太夫か女房のうゑハそれ掛られされ

いつまでなりとも熊さ娘方おくハよひむこへんと熊言の
ことのへうれし捕くといへ共よき事もなくおる故まつよ
清文なく佛家ニよ風やの本居氣といふやく二三へりぬ
及代壱人娘よ揚母ならといへるへよし二八の花さかり
半生ことを壺こよひり此菊三郎をこ上とへ清ふなつあう
るなまれ付これなるへそしふぬませてもイヨよ当世の
金箱の大切者さるゆへありてそれとやや有とさぬ
とものうつろうりきこ争ひ互に恋よしま氣ふへるるまれハ
さらにぢゃわいろぞとつよる口をいふすのもあるまし
とくく清文書を仲へやつていよく後三のとりむすひ

来ル霜月朔日ハ日がらもよしとその日ときまれハ家内の悦
ひ支度も別して美をつくし輪奐嫁入の駕のり物くるまと
手道具きらびやかに中の名ノへ田り行くり雲を霞とおくりとゞ
小門乃日をうかりとぶん是出ハ床への飾その余せり出し
縫さるゝおくさきにきされの大仕かけ細工へ壱ッきこ太
夫婦とさし嫁への入ちかハ惣乱をさハし浦鳴乃
給仕人にみいらこなるなる料理あんだれハこのまうゑ坊め仁
作り背のたうる振袖るこのこゝだに当へそるまゝ日上きいる当へ
御式前かうらねりのたとへ姻縁とハふすりの八夜をひまりしさる
なるのじやといふも扣しきはる是まて仲人役まて長談と退

何でも祝ひのうち込ちりからを合くるりとおちをとらしやつとさ
さゝら物じやてよひ斗ハ口上せの俸来(きこらい)〳〵帰去来(くゑんゑんりさ)と
いやてをはらしくさとと嵐璃(りんちう)に居なさんずり例のチヨボ
後りて待居る若嫁とよ母の作のイーリ〳〵と二声うるに
いかやうちずひけらじやかく宮まうさるやとに嵐やの若嫁
ゆかりとお宮へ参をそり上てくうてひられハ上下きも残
はやし連て詣めしにされるなんと詣やしてぞ居らり
なり祝て花よめの姿扮よへ母親つまそひて入来り
先蒸座の賜法よる作宮ハ早ゑみさきうるらハ往つゞや
木戸ハ姿ハ嫁ぐまいりますにチヨボ作業門と次へ出ひ

〽全ハ嫁ハいくらもちらしく滴かへまきてゑうおりしとあけアシ
母さ義太夫さんの御帯どハかり家々入りしやけらりとひと
なすめく形ら手ずつ作通りなされませと次に出き一間
の内母の後ろに座ハなされバお茶拇をとて〳〵ひまどりて
まそぶもく嫁れのをもしききなのしハテ妙なもて来もの
とものじや早ハなつぎてうる付ら下への人出てお母さづく
立出早ハ御ふてうなれよう手そ御出なされまし花その程く
待ち太夫の仲人よしく木戸より家の御嫁ごそとりてひまどる
去ーバ今年といひ年もそく申されぞまうまとあれど
お母様どの御居をうるの大きなひどやと申すや御ぞん

乃通り此方家内は何れもそれ〴〵揃ての芝居好まゝ
なんぞや役者きついひいき芝居ずきなる人ゆゑお婿ごをまへ何嫁ふうと
らへ又しても気の持つ合ぬは不縁のもと　ハテ廣い世界の
事じやもの又母人何をかゝるに芝居嫌が外にたんと
母もそれに添へ嫁もよかな人に望ゝものでおよふしかもへれんと来で
奥人る所にて門と持どろつきまゝるもさいがぬ母姉や　イヤ
申嫁ご（まゝしうとめ）アイヤ　世幕やの嫁すて姑き母　ツリヤ　挨拶が遠まくれ
休み息の人共幕ぞの外へ芝居きらひのおやがたもらうて
嫁よりひとところその上で芝居嫌の望へしにとぞんし
たるくはれく来りて不縁と名がつりて合はぬといへどの

おもろじや　サア悔のよ　ハテそれハ大ぐへ目のとゞく所から
くどくいふのじやとそもじの心何ひそも何れての見へ
芝居嫌と姑く事のならぬもしのんたらうが気おす
ふみも此母がのこしおきまにはさいかくようにする
きりくはれく姑の人でもまたふと度もあれてとこ
出てく姑人への母親娘世帯うくこつてまぞてよあ入
とうかこれまうちひとりとうく　姑御のぞうしのくるま
りつゝやされる芝居へはつとひいきに芝居ずきてつひ
出やとゝく何人ものむごひなされうごとせく出ゞく
乃おまゝの家内中（さうちう）がわりて物とつひの声（こハ）いろ

つい此席に出ますものが市川の白猿でござりますれど
とくまうのを申せば母の氣もつりあひござる乃袖とて
らひ コレ 娘これと申さまや拙りて上に立まる声色ハ
誰のまにも三ケ津やぐらこぞつて御ひいきやまひ江戸市
川乃名人とその名をとゞろかしも偲を拾して先年に
出世をまつ扨やむなしう私もその通りそゞ
かはいがつて祝言（しうげん）させ申 婚人ぐ夫さのハこえ
なむござ成 初（かじめ）からかゝる時あり さぞ モウ これからハ
出まうぶれ芝居ひゐきのむさハいふぬ サア 娘あつくるが
よくい帰らして立さんとまるまに一かたならぬ海老蔵と

声色をきゝわれ表に出てきざむ芝居を言ひとりにひとそう
らがひかるヲ そうじや海老蔵とそでめて云声いろ
を言ひのつめの門に出て其のが母ひ通らつ声色をまらて其の
何のべきは海老蔵と芝居好ぶけらんぎくんらむさとめ
あつてハよひらやと又立上るとてんの様子よは又海老蔵
ら又海老蔵とそでめて云声色の子此門ら イヤ 海老
ハ海老蔵伜の先祖は先づんとさせと梅幸が声色
で立出るハあんきよの作法 ヤア そうらしてる作法を
ソリヤ先祖（そうざう）ら職方し全作のどきさの立上り ホウ 娘
海乃志にゆかりにらんら子よく祝言させと イサ 此二方へ

国立国会図書館　タイトル『俳優楽室通』　請求記号　京乙-208　ガラス使用

むこう引出と出されしと京へ出せハ懐よりうや〳〵しく
とり出し是ハ我家代々に伝りける役者評判百
人一首評判が上ての士で居宅がどこぞく絵合が何
百五番役級にかまぐく自ずより町の国政が似顔
絵懐中ゟ紙入出しといふ世をもまねてハやかまし
やとりもって役よりぬけ出方の真といふ六
尾張町の世界と悔りく書さ似の体絵
の相が入いやと何れば志うげんさせぬとをるで其
洞の里三川語駅子ハ立川とさしう向こかれ
ふきしおれ八二人書乃似乃肝絵進上いふ

いざおうけとりなされしと表にひろく一声
見まとひ内見へとられバ駅子ハ恐らくおもふへき
うさん来ず人来るの是ハどうして此方ハ穿ざくで
とかしまひ婚礼の子細皆此のかくいふんと
ぞんぜし取妻子もまへ世渡込とり覚へさ声
及走まひあうをと皆べ似顔絵の写とる志らは
は似顔絵を年引にまぎしてといふやおうかれ
恋うげんあるし懐中よりとり出し汲せハとって
のんで一禰碑山ゝ九ハ似せうのみく誠よえや
その弟そのまへそとへ出しれてかうでんまといふ

ガラス使用

噺法なるよし〳〵なくとうじやぞやく
よくことかいまでいるぞ○是（これ）てそ誰ぞござりませぬぞゑ
二番目とさづし娘金時伸る嵐屋の中なるらぬどもの
賀し出ぐぐずざアいと如やるがようしぶ声に
清きあつよ相生（あいおい）の松（まつ）よそ月出さかりのりと
一（ひと）ふうふの秋楽（せんしうらく）の秋万歳（せんしうばんぜい）万々歳（ばんぜい）
打つまでる長幕（ながまく）や納る飯てそ
めでたけれ

俳優家見原氣質　大尾

跋

盛（さかん）なる者（もの）ハ必（かならず）衰（おとろふ）る時（とき）ありて古今（ここん）其（その）例（ためし）
数（すくな）からず桃太郎が悪雄（あくゆう）舌切雀（したきりすずめ）恩謝（おんしや）紅粉（べにおしろい）
皿（さら）の好曲（かうきよく）及び兎（うさぎ）が輗讐（かちかち）猿蟹（さるかに）の闘争（とうさう）花咲（はなさき）
爺（ぢぢい）の仁徳（じんとく）其より五常（ごじやう）三徳（さんとく）勧善（くわんぜん）懲悪（てうあく）の旨（むね）
趣（しゆ）といへとも當世（たうせい）の笑話會（おとしばなし）に比（ひ）してハ
閻根ハお先とかけり周羅（ひつくるめ）ハ鬼人島（おにがしま）
埋（うつも）れ若宿昔（むかし）ハの赤表衣（あかべうし）くなつて後（のち）

赤青く變じ比企野屋の銅壺燒琉球芋
大木の生際てんと婦てらいこいの口調みそ
ぞうすいござせへもてし没る然りしつへとも有雅山
の寒鳥侍夢山の郭公百年前の画云よ
して今に行ハれてハ鄙古雅を慕ふの
心このナトト子共亢合点がくよ故人丈阿この
助語世人老る支儆し憶ハ三十余年来
釋說發行する高巧の戯作誠よ日され

新しく滑稽る名誉なる事既ニ十有
余年於之奇談怪傳足を洗ハくらし八
丹波の奥山へと閑居帰見の教訓ホハ
功成名とぐまて流りをさらりと柳原ニ
身退き干戈亂世の一代记も弓を袋
太刀ハ鞘よの發語よ倣て日傘の鞘
干物屋の袋り納て損膺買の為しり
牢しめて配所の籠よそこをる清住古を

ガラス使用

攬るに近松窮中に國性爺を作り西鶴が
小夜四更ハ三夕の著述ありし乃雜戲ハ
半日に編自笑が禁短氣一日の戲述と聞けも
年々歲々人同じからバ其功名盛なる者
更に今春よ噫悲しいかなや八文字やの
文隠意味豈當世の及ぶ所ならん乎
自笑其積が作意を惜むの余り
今や流行に合をぐ仍し承知して
那箇一小説を著も覧着人情の跡
とらし必笑かん可笑ハ拙釜の爺やの乎し
なるハ藥罐をかぶりあく（トキニモシ）後世
拙を孫寒鴬と古きを世に動ら
しくもちのいふ

嘔囉哩樓　三馬跋

京乙
208

東都俳優似顔

畫工　一陽齋　歌川豊國

門人　歌川國政

式亭三馬輯

日本橋通四丁目
版元　上總屋忠助

帝國圖書館藏

ガラス使用